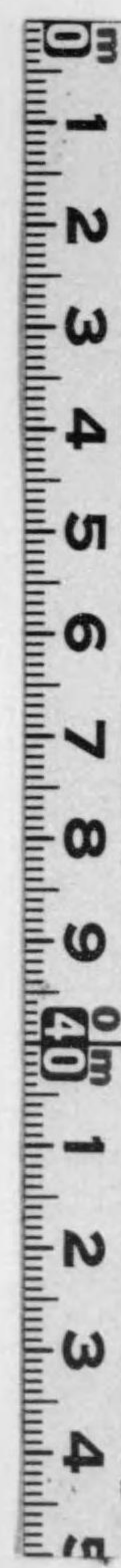


328

378



始





71266

328-378



御  
粉  
集

第  
八  
卷

★ 正  
5. 5. 27  
購 求



例言

靈元院御集は歌數多くして、一卷に收めがたければ、第八第九の兩卷に分載し  
まつれり。

御集はまた桃葉集とも申す。圖書寮所藏に三卷本、六卷本、十三卷本の數種あり。  
十三卷本(前編六卷後編六卷御幸宸記一卷)は歌數は多しと雖も、誤脱少からず。  
寛文三年より享保十四年にいたる六十餘年間の御製を、年代順に載せたる三  
卷本は、善本と思はるれども、其中卷缺けて完本ならざるは惜むべし。また内閣  
文庫所藏に三卷本と七卷本とあり。三卷本は享保十八年冷泉爲村の類聚せる  
ものにして、信憑するに足るべしと雖も、歌數多からざるは憾むべし。七卷本は  
歌數頗る多くして、しかも誤脱少く、御集中の最善本なり。本編に收載せるは、即  
この七卷本なりとす。

本書は華頂宮家の御秘本にして、其奥書に、右七冊者靈元院御製也。傳聞稱桃  
葉集謹書寫之不可許他見者也。享保二十年孟夏三五日 二品深譽尊胤と見



え、なほ毎巻の終に「以御詠草直書寫之」と記されたり。  
 本書第一第二の兩卷には、寛文十年より元祿五年にいたる、二十四年間の御製  
 千七百五十餘首を、四季戀雜に分類して收め、第三卷以下には、元祿六年より享  
 保十七年(天皇崩御の御年)にいたる、四十年間の御製約四千首を、年代順に輯録  
 せり。

本書は専ら圖書寮本に據りて稽校謹訂し、明に御製の闕けたりと見ゆる享保  
 十三年の條をはじめ、其他これを補へるところ少からず。

大正五年四月

古谷知新謹識

### 御製集第八卷目錄

靈元院御集卷一	一—三六
春之部	一
夏之部	六
秋之部	三
靈元院御集卷二	三六—三九
冬之部	三六
戀之部	三六
雜之部	三九
靈元院御集卷三	三九—四一
元祿六年御製	三九
元祿七年御製	四〇
御製集第八卷目錄	一



御製集第八卷目錄

二

元祿八年御製	三三三
元祿九年御製	三三六
元祿十年御製	三三五
元祿十一年御製	三三七
元祿十二年御製	三三七
元祿十三年御製	三三八
元祿十四年御製	三三三
元祿十五年御製	三三四
元祿十六年御製	三三九
靈元院御集卷四	三三三—三三〇
元祿十七年御製	三三三
寶永二年御製	三三四
寶永三年御製	三三七
寶永四年御製	三三九

寶永五年御製	三三八
寶永六年御製	三三九
寶永七年御製	三四八



御製集第八卷 目錄終

御製集第八卷

靈元院御集卷一

春之部



歲中立春 寬文十二年十一月二十四日

春とともに立つやかすみも白妙の雪のふる年なほぞへだてぬ

歲中立春 延寶五年二月二十五日

のどけしな程なき年の日數をも今日立つ春にかぞへそへつつ

歲中立春 貞享三年五月二十日

靈元院御集 卷一



暮れのこる日かずもそひてあら玉の年のを長き春や立つらむ

歲中立春元祿三年六月二十五日

年のうちは松の雪をや花と見む今日より千代の春も來にけり  
あら玉の年のこなたにかすみけり春たちこゆるあふさかの山

歲中立春同四年十一月十八日

あら玉の年待ちあへず年のうちにまづ千代ちぎる今日の初春  
年のうちは雪も消えあへぬ山の端に霞をいそぐ春や立つらむ

歲暮立春貞享二年六月二十四日

年の内は残る程なき日數をも待ちあへぬ春やまだき立つらむ  
今日はまづ名にのみ立ちて新玉の年のひかりを春や待つらむ  
年もこえぬる元祿二年十一月二十五日

昨日まで春はとなりとへだてこし中垣よりやとしも越えぬる  
四つの時のゆきては歸る朝もよひ昨日を去年と年も越えぬる

立 春寛文十三年四月二十四日

薄氷打ちいでて今朝は春來ぬといはまの水もいふばかりなる

立 春延寶二年六月二十四日

立ちそむる霞の袖のうららかに春を見せたるあさづく日かな

立 春同四年二月二十二日

冴えくれし年は夜のまにあらたまの春立つらしもかすみ朝風

立 春同五年十月二日

鳥が鳴くあかつきかけて來る春の道はあづまの關もさはらじ

立 春天和二年

天地の人にへだてぬこころをも今日あらたまの春に見すらむ

立 春同三年三月十六日

男山いくよのかすみ色をへてさかゆくはるに立ちかへるらむ

立 春貞享五年五月十九日



そのかみの光かはらで出づる日の長閑に照らす春は來にけり

立 春貞享五年八月

朝づく日かはらぬかげもあらたまの光くははる春は來にけり

立春風寛文十年二月二十四日

こほり解く池のみぎはの朝風の吹くかた見えて春や立つらむ

立春曉天和二年五月二十五日

明くる夜の空より見えて立ちかへる年の光ぞ四方にのどけき

曉立春貞享元年二月二十四日

一年のあくる夜いそぐ鳥がねやまだきに鳴きて春を告ぐらむ

明くる夜を鳥が鳴くねにおどろけば東路とほく春は來にけり

關立春同三年九月六日

明けそむるいはとの關をはじめにて東の山もはるやこゆらむ

春色從東到同二年十月二十四日

のどけしな出づる日影をしるべにてそなたより吹く春の初風

いつしかと霞むそなたの山かづら春くる色を見せてのどけき

貴賤迎春寛文十一年正月十九日御會始

のどけさは玉のみぎりもむぐらふも隔てぬ春に雪やけぬらし

野澤始迎春元祿三年正月十一日御會始

春の水の澤邊にみつる時つかせ野なる草木に吹くものどけし

かすむ野の春めづらしき朝な朝な澤邊のたづものどかなる聲

初 春天和二年六月二十五日

吹きかへて長閑になりぬ志賀の浦や波にも花の春のはつかせ

初 春貞享元年十二月二十二日

あかすいやいや年のはに水無瀬山かはらぬ世世のはるの霞を

水無瀬がは水を出でて行くなみもありとやかすむ春の山もと

初 春同四年六月二十五日



花鳥もまだきにいそげ佐保姫のころにまかす春は來にけり  
春きてもまだ雪さむき吉野やま花やおそきとまづかすむらむ  
野も山も春はわくとやふる年の雪もけなくにかすみそむらむ

初 春貞享五年二月十日

峯たかみふりさけ見れば春の日の光のどかにかすみそめつつ  
峯たかくてらす春日をあふぎてもものどかなる世の始とぞ知る

初春風 同年正月二十六日

霜雪のおなじこするに吹くもさぞ花をころの春のはつかせ  
みな人の言葉の花もいそがなむのどかなる世の春のはつかせ

初春霞 寛文十二年二月二十二日

のどけさや四方にみつらむいづこともはるの光はわかぬ霞に  
立ちそめて春をぞ見する佐保姫のころもでうすき霞ながらも

初春霞 延寶四年正月二十四日

まづ立てるかすみの袖よ春はまだはつ花ぞめもとほき山邊に

初春霞 同五年正月二十七日

春の色の初しはなれやいやましに天つ空にもみてるかすみは

初春霞 貞享二年九月八日

やはらぐる光や春にかすがやま雪もさながらかすみそめつつ  
春の色をふりさけいまぞみかさやま立てるは浅き今朝の霞も

初春雪 寛文十一年正月二十七日

來るはるの道のしるべか雪の庭かすそふ沓のあとのむらぎえ

初春雪 延寶八年二月二十四日

たちそめし昨日のかすみ色かへて雪げにくもる今朝の春かな

初春雪 貞享三年二月四日

春あさきかすみは空に埋もれてまた降り出づる今朝の雪かな  
降りそふはたまらぬ春のみぎりにも氷れる去年の雪ぞ残れる

靈元院御集 卷一



初春山 元祿四年正月二十五日

かすみ立つ山をたのしむ今朝よりぞ春のどかなる心をも知る  
雪消ゆる山はたかきもいやしきもみな春にあふ色ぞのどけき

都初春 貞享三年正月十八日

ゆき消えぬ深山やいづく霞たつみやこは春ののどかなる日に

初春松 延寶二年五月四日

春にあふ世ののどけさをよろこびの聲ある松の風や告ぐらむ

初春松 貞享四年二月二十五日

今日にあけて色まさりけり神垣の松は一夜のはるを知るらむ  
いつとしもわかぬ色香はわかみどり立つ春見する岡の邊の松

初春鶯 寛文十年二月二十五日

今朝のあさけ春知り初めて鶯のさへづる聲のいろものどけき

初春鶯 延寶八年二月二十二日

春つげて今朝うぐひすの我れはとや思ひあがれる初音鳴くらむ

初春見鶴 寛文十三年正月十九日御會始

こほりとく池のががみにすむ鶴の千歳の影も見えてのどけき

初春祝道 元祿五年正月十一日御會始

天がしたいつも八雲の道しあれば神代のままの春に逢ふらむ  
世の春にあくるはじめも乾の道ひとりなすとやまづ霞むらむ

早 春 寛文十一年四月二十四日

立ちそむる春のかすみは花鳥の色音にもまづよそふべきかは

早 春 天和二年二月二十四日

出づる日のそらにぞしるき山の端の霞をいそぐ春のひかりは

早 春 同三年六月一日

はるかにもかすみそめたり住吉や神代のはるの沖つしらなみ  
住の江やかすめる波のあさなぎに松よりおくる春のはつかせ



早 春元祿三年六月八日

和歌の浦に今ひとしほを松の葉の色まさるてふ春は來にけり  
いく千代ぞ春立つ波のたまつしま神代のままに霞むひかりは

早春風 延寶三年二月二十二日

のどかなる心のいろに吹きなすや柳さくらの木の芽はるかぜ  
吹くあとも見えてのどけし霜雪の枝にこもれる木の芽はる風

早春風 同四年六月二十五日

大比枝や雪よりおろす山風もみやこのはるに今朝かすむなり

早春風 貞享三年二月二十八日

のどけさは花うぐひすのしるべぞと待ちえてあかぬ春の初風  
池みづのこほりも雪もとけそめて吹くあとしるき春のはつ風

早春風 元祿五年正月十七日

花と見む入江のなみのたまつしま春立つ風の吹くにまかせて

としなみに今朝立ちそふやわたつ海のかざしの花の春の初風  
たまつしま年立ちかへる江の波の花に吹くなり春のはつかせ

早春雲 元祿三年九月十日

峯の雪はまだ春さむし朝日かげにほへる雲をかすみとも見む  
霞かは雲のころももはるきては雪げわするるいろにのどけき

早春霞 延寶六年正月二十五日

山の端になびき初めたる春のいろの霞ややがて空にみつらし

早春霞 同六年二月二十二日

立ちかへる霞やいくよ水無瀬やま洞のむかしの春をへだてて

早春霞 貞享四年五月二十八日

海やまのいづくかもれむ朝日かげ空よりかすむ春のひかりに  
なべて世の春とは今朝ぞ峯つづきいづくの山も霞むひかりに

山早春 元祿三年正月二十五日



とき知らぬ雪はなかぞら富士の根もかすむ麓や春を見すらむ

關路早春貞享二年九月二十一日

夜の程に春やこえぬと明けそむる關のとやまのまづ霞むらむ

早春河天和二年九月十五日

いつしかも雪げの水をせき入れてまさるおとはの春の河なみ

いとはやも氷を分くる河なみに春立つかせのあとは見えけり

浦早春寛文十三年二月二十五日

春もあくる蜚の焚く火のあかしがた煙も今朝や霞みそふらむ

早春浦貞享三年二月二十五日

春きぬと霞もいまは田子の浦の波にたぐひて立たぬ日ぞなき

春はまだあさかの浦にはす網のめに立ちそめてかすむ波かな

早春水元祿二年正月二十五日

行く水も春をしらす音羽がは年なみはやく立ちかへりつつ

いつしかに行きてはかへる年波もまだすゑ遠き春のみなかみ

早春鶯延寶四年二月四日

鶯のうつろふ聲をはじめにて木の芽もはるのいろやわくらむ

早春鶯貞享五年二月二十二日

鶯のはつねを松のかげしあればここにも千代の春を告ぐらむ

千代のかげ朽ちせず残る松の上にくる春告げむ宿のうぐひす

雪消氷又釋延寶二年正月十九日御會始

安左許保里春者不敢奈賀留女利當都伊波那美増流雪消爾

とくる氷の貞享二年十月三日

初瀬がはよどむせもなく來る春にとくる氷のうきてながるる

春の色を今朝ぞうかぶる池ひろくとくる氷のあとのささなみ

子 日寛文十三年六月二十五日

あたらしき殿づくりして立ちかへる春に千年の初子の日せむ



山子日貞享三年三月二十四日

龜の尾の山に根ざすや萬代をまつにかひある子の日なるらむ

山子日同五年八月二十七日

誰れしかも子の日に出づる御幸せしためしをひかむ紫の野に

子日松元祿五年二月二十五日

千代いはふ松をはつねの今日よりや心も野邊の春にひかれむ  
いやつぎに幾世もつきじ春ごとの子の日にちぎる松の千年は  
植ゑし植ゑば幾千年をか春ごとの子の日の松に數へそへまし

霞寛文十年四月二十四日

世におほふ霞の袖にあまるこそあまねき春のめぐみなるらめ  
春がすみゆたかに立てる袂にもつつむにあまる千代の色かな  
沖つなみ八千代をかけて八十島の霞むみるめもあかぬ春かな

霞延寶三年十月十四日

霞天和三年十二月二十九日

舊年のあらしも雪もうづもれて春のひかりをしくかすみかな  
千代こむる春の色とは神垣のまつに見せても立つかすみかな

霞知春寛文十二年正月二十五日

人ごころのどけき四方の霞にもあまねき春のめぐみ知られて

霞知春貞享五年正月二十五日

いつの間にはる立ちそめて明くる夜の光まちとる霞なるらむ  
天つ空のどかに見えて来る春のなほ色そへと立つかすみかも

霞添春色延寶六年正月十九日御會始

のどかなる四方の霞の春の色に山もみどりのまゆひらけつつ

朝霞同二年正月二十三日

浦とほく立てるやかすみ浪風もなきたる朝のみるめのどかに

朝霞元祿元年十月四日



朝日かげにはへる山の尾上より染むるかすみの春のくれなる  
朝 霞 貞享三年二月二十二日

あはれともたが見ぬ春の洞の名をいまはた残す朝がすみかも  
薄暮霞 天和三年二月二十五日

暮れぬとて寐にゆく鳥の聲ばかりかすみがくれに残る山もと  
くれ深く霞みにけりな残る日のかげ見し山もそことなきまで  
山 霞 延寶四年四月二十五日

朝日かげにはふばかりに見し山も夕はふかく立つかすみかな  
山 霞 天和二年二月十六日

今朝見れば四方の霞の春の色にたちもらさるる山の端もなし  
春の色にあらそひかねて信樂の峯のあらしも今朝かすむらむ  
山 霞 天和二年

時しらぬ名にのみ立ちて富士の根の雪もひとつに霞む春かな

山 霞 同三年十月二十七日

はるのきる衣のぬきのいとか山かかるもうすき朝がすみかな  
山 霞 貞享元年十二月二十四日

時しらぬ山やいづれとたどるまで富士の深雪もかすむ春かな  
いまはまた外山も見えず高砂の尾上のかすみ日かすかさねて  
山 霞 同三年四月二十一日

春の色と見やはとがめぬ昨日今日たつは淺間の山のかすみも  
ただ一重立てるも山のをもちちにおなじ霞のいろやわくらむ  
山 朝霞 寛文十一年二月二十五日

朝日かげにはふ高根もけしきだつかすみに春の色ぞのどけき  
霞 満山 貞享二年正月二十八日

この頃のかすみは山をすがたにて峯ふもともわく色ぞなき  
きのふまで外山にのこる黛のにはひも消えてかすむあけぼの



霞満山元禄三年七月二日

尾上より見そめし春の幾日とて外山も今朝はかすみ立つらむ  
みねの雪ふもとの木木の緑をもひとつに見せてかすむ山かな

遠山霞同三年正月十八日

ただ一重立つやかすみの袖かけて遠やまひめぞ春を見せける  
春さゆる比良の深雪も色消えてみやこの北に今朝かすむなり

連峯霞延寶八年十二月十八日

立ちつづくかすみを見せて遠近の峯もひとつに匂ふやままゆ

嶺樹霞貞享四年二月二十二日

はつせやま嶺のかすみの春のいろに弓槻が下も雪やのこらぬ  
春あさき色とも見えず初瀬やま檜原にくもるみねのかすみは

野外霞元禄三年十一月十日

やはらぐる光を神のかすが野はかすみも春もかぎり知られず

かすが野に立つや霞のすゑ遠みかぎり知られぬ春を見すらむ

野外朝霞延寶四年二月二十二日

そことなく明る野原のすゑ見えて山も霞をいづる日のかげ

關路霞同八年二月十八日

關の戸に聞きしやそらね鳥が鳴くあづまの山はかすむ夜深さ

霞中瀧貞享二年五月三十日

佐保姫のかすみのころも春の日にさらすやいづく布引のたき  
おとせずば落つとも知らじ白沫の消えてかすめる宮の瀧つ瀬

江上霞寛文十二年二月一日

霞にはこもりえとてもみなれ棹さして舟路はたどりしもせじ

河霞同十三年正月二十五日

霞む日は音ばかりして音なしの名や河なみに立ちかはらむ

河霞貞享元年二月二十六日



立ちつづく霞や千里おほるがは下はかつらのなみもほのかに  
のどかなる霞のみをもあすかがは淵瀬にかはる春かせぞ吹く

海 霞寛文十一年二月二十四日

あまごろもはるの霞の薄きこそはてなき波のみるめそへけれ

海上霞 延寶三年正月二十五日

蚤ごろも春のかすみの浦波や名にたちまさるみるめなるらし

海邊霞 天和三年六月一日

たまつしま入江のかすみうちなびき春待ちえたる和歌の浦風  
のどかなる入江の波の玉つしま見れどもあかすかすむ春かな

浦 霞同二年

うら風もおよばぬ空の海かけて立つやかすみの沖つしらなみ

水郷霞 元禄二年二月二十二日

いく世世の春にかはらす水無瀬川やまもと遠く霞むひかりを

社頭霞 貞享元年六月二十五日

すゑ遠き春をこめたる神がきのしめ野のかすみ色ものどけし  
やはらぐるひかりを見せて雪さむき北野の原もかすむ春かな

霞春衣 同三年二月二十二日

春といへば峯のいはほに袖かけてあまの羽衣たつかすみかな  
から衣かけてほすかと佐保姫の名に立つ山のかすみをぞ見る

霞春衣 同五年二月五日

春日野や春はみどりのすり衣うらめづらしく立つかすみかな  
佐保姫の名にたつ山のはるの袖うちはへかすむ春日野のはら

霞春衣 元禄四年九月十六日

佐保姫の今朝からごろも織る手もしづはた山の霞にや見む  
春やとき霞のぬきのうすごろもかさねぬ袖に冴ゆるやまかせ

霞遠山衣 天和三年五月二十四日



かすみ立つとほやま姫のうす衣はるとや峯にかけてほすらむ

鶯 天和二年

梅やなぎ世はみな春のいろに香に催したててうぐひすや鳴く

鶯 告春 貞享二年二月六日

春の日のひかりは誰れもたどらぬを我れ告げがほに鶯(のこ)の鳴く(やい)  
いとはやも春告げそめて春日野の雪間を急ぐうぐひすや鳴く

鶯 告春 元禄五年三月二十九日

をさまれる世をも告げけり鶯の春をたのしむ今朝のはつ音は  
君に今もよろこびの春つげておのが名しるき宮のうぐひす

鶯 告春 寛文十年五月四日

春風のしるべよりこそ花の香も待ちあへず鳴くうぐひすの聲

鶯 馴 天和二年三月十六日

うぐひすにとはばや宿をなれて来る窓はくれ竹さける梅が枝

聞 鶯 寛文十三年正月二十五日

梅はまだにほはぬ春を心とくまづ知りそめてうぐひすの鳴く

朝 鶯 天和二年九月二十四日

朝日かげうつる片枝の春のいろに初音おくれぬ宿のうぐひす  
草も木もまだ冬ごもる朝な朝な何をはるべとうぐひすの鳴く

朝 鶯 元禄四年正月二十九日

聞くたびにあかすもあるかな春の霜さむきあさけのまどの鶯  
のどかなる聲めづらしな朝霜の竹の葉さやぐまどのうぐひす

夕 霞 同三年五月二十五日

鶯もこなたの窓にうつる日のゆふべのどけきかげしたふなり(ちし)  
夕日さす岡邊の松のうぐひすも春はわきけるこゑに鳴くなり

鶯 出谷 同五年正月二十五日

出づる日を見ちびく春のしるべにやさそはれなれしたに(ま)の鶯



鶯の出でしすもりに誰れなりて谷にはよそのはるしたふらむ

野 鶯 延寶六年二月二十五日

雪さむき谷のころもうちとけて裾野の春にうぐひすや鳴く

園中鶯 寛文十二年正月二十五日

梅やなぎまだき色香をたづね来て春知りそむる園のうぐひす

故郷鶯 延寶三年十二月十一日

はる幾世ふるの都はうぐひすも花になみだをそそぎてや鳴く

竹 鶯 同二年六月二十五日

世は春のうぐひす馴るる窓の竹花咲かぬをやうきふしにせむ

竹林鶯 同八年六月二十五日

古巢出でて羽ならはすや山陰の竹のはやしにうつるうぐひす

竹林鶯 天和三年二月二十五日

春もげにおくある竹のはやしかな初うぐひすの雪に鳴くこゑ

竹しげき外面の春をまづとひて人にはうとき今朝のうぐひす

隣家竹 鶯 貞享二年正月二十五日

隔て住む垣根の竹のよそながら聲うとからず馴るるうぐひす

松間鶯 天和二年四月二十六日

うぐひすはへだて心もな垣のそなたにならす竹のひとむら

鶯 爲友 延寶四年十二月十三日

咲きて散る色香は知らぬ松が枝に花とやいはむうぐひすの聲

鶯 呼客 貞享二年正月十八日

いろまさるみどりはいはじ鶯のはつ音を松のひとしほにして

花を思ふころの友と春をへて我れに馴れぬる園のうぐひす

誰れを待つやどと知りける鶯のこぬ人さそふ音とも鳴くらむ

春情有 鶯 延寶五年正月十九日御會始



多春摘若菜 延寶三年正月十九日御會始

萬代のはるをちぎりて心をも野邊のわか菜や摘みはやさまし

雪中摘若菜 同四年六月二十四日

いつしかと尋ねてわけし跡よりや雪間は見えて若菜摘むらむ

若菜 天和二年

それと見ていつより摘まむ野邊はまだ若菜も何もわかぬ二葉を

水郷若菜 同三年

をとめ子が家路をちかみ玉しまの川邊に出でて若菜摘むらむ

若菜 貞享三年五月二十日

昨日今日雪消の澤におりたちて摘むもすくなき水のふかせり

野若菜 元禄元年十月七日

雪も今朝ふるから小野の初わかな春のこころを忘れてぞ摘む  
初若菜もゆとも見えぬかげろふの小野の雪間を尋ねてぞ摘む

野若菜 同四年六月二十五日

摘みそへむ春を老せぬ同じ名の若菜にちぎれ野邊のもろびと  
今よりの野邊のみどりの初若菜はつかに萌ゆる色もめづらし

春 雪 延寶六年二月二十五日

降りそめしおもかげかへす山かせや春もあらちのみねの沫雪

残雪 寛文十三年正月二十五日

冴えかへり春もあらしの松にこそ友まつ雪はなほのこりけれ

木残雪 延寶二年二月二十二日

深山木は咲きて色めく花もあらし雪だにのこれ春のしるしに

松残雪 元禄五年十月十八日

年のはのさかえに見よと千代の色を松にふかめて雪や残れる  
つれなくて残るは友をまつが枝に雪も千とせの色やならはむ

餘寒嵐 天和三年二月二十一日



春のいろはさらでもうとき松の戸を去年の嵐のなほ叩くらむ

朝戸出のたもとをさむみ春も猶あらしにこもる窓のうちかな

餘寒嵐貞享五年六月十七日

みよし野は花のところのあやにくに山下かせや春もさむけき

餘寒元祿二年正月六日

立ちなれぬ霞のそでを吹きかへしまた雪さそふ今朝の山かせ

餘寒風同五年正月二十五日

ただならぬ春の嵐よ佐保姫のそで吹きかへし今朝は冴ゆらむ

雪をさへ誘ひきぬべく冴えかへりこすのまとほす春のあさ風

むめのはな寛文十二年二月二十四日

むらさきの一もとならで木木はみな匂ふや梅のはなの春かせ

栽梅同十一年二月二十五日

植ゑそへておそくもとくも咲くやこの花は言葉の花の種かも

若木梅 延寶四年十一月二十五日

ふりせずよ園生の梅の枝かはすなかにわか木の花はわかれて

露暖梅開天和三年

朝日さす片枝のつゆに咲く梅や春さむからぬ香ににほふらむ

月前梅寛文十一年二月二十五日

月こそあれ霞の袖もつつみえぬ梅はさやかににほふ小夜かせ

香ばかりぞおぼろげならぬ咲く梅の花はわかれず霞む月にも

梅 風天和二年

吹きもえでかばかりならば梅が枝に待たれむものを春の夕風

梅 風元祿四年二月二十五日

いまよりの千とせをこめて神垣のはるかせ遠くにほふ梅かも

梅薫風貞享五年二月二十七日

難波津のことばのはなの春風やつきぬにほひを今も吹くらむ



行きてだにうらみぬ風のやどりをや人にをしへて匂ふ梅が香

夜梅 天和二年

身にしめてくらせるよひの手枕におもかけながら通ふ梅が香

夜思梅 元禄二年正月二十五日

おもひねの夢をおどろく梅が香や見しおもかけの花のおひ風

忘れては夜もめかれぬおもかけに立枝の梅のかをる手まぐら

梅 香寛文十年二月二十五日

誘ひきて袖さへにほふ梅が香にうらみむ風のやどりともし

梅遠薰 延寶四年二月二十八日

吹きおくる野風（にイ）をかをるをちかたや茂木が中の梅さかりなる

梅久薰 元禄三年十二月二十五日

みづがきにもざりて匂へ今年より春知るうめの花のわか木は

路 梅寛文十三年三月二十三日

行きすりにほの見し袖の梅が香をありとやここに匂ふ春かせ

梅移水 元禄五年二月二十五日

行くみづに梅が香うかぶ夕月夜おぼろげにやは眺め置きける

たが春のおもかげうつす夕月夜梅が香うかぶ宇治のながれは

咲く梅の花のしたゆくかきね水へだてぬ香にや影もにほはむ

里梅 天和二年二月二十五日

とひなれぬ里のあるじも咲く梅の花に立ちよる人なとがめそ

故郷梅 貞享五年三月二十九日

軒端あれて人もすさめぬ梅が香のたが袖戀ふる春をへぬらむ

梅花薰 寛文十二年正月十九日御會始

玉すだれうごくばかりの春かせに内外もわかすにほふ梅が香

簷 梅延寶三年二月二十五日

うぐひすもやどりにしめて一きはの色をそへたる軒の梅（が香し）かも



寐覺梅 天和二年三月十六日

梅が香をまくらにのこす小夜風の夢はいづくに誘ひすてけむ

梅交松 寛文十一年二月二十五日

梅が枝は吹くとも見えす立ちならぶ松に音してにほふ春かせ

梅浮水 延寶三年四月二十五日

散りぬれば氷のうへに見し雪のおもかげうかぶ梅のしたみづ

柳 天和二年

折らでしもかこひやすらむ陰ふかき柳にこもる賤がそのふは

柳 貞享三年五月二十九日

青柳のいとしも長き春の日に三たびはさこそおきふしのかげ

柳 靡風 寛文十二年三月十九日

柳にはよわしといはむ風もなし吹かぬまもなほ枝はうごきて

柳 露 貞享元年六月二十四日

佐保姫の春のかざしの玉かづらかけてぞた<sup>みだ</sup>るるあをやぎの露  
吹くとなき柳が枝のはるかせに玉の緒とけて散るつゆもなし

柳似煙 天和三年五月七日

こととはむさとのしるべの煙かと萌えて柳のなびくひとむら

行路柳 元祿二年二月二十二日

をらで行く袖もあまたにふれつらむ道のちまたの青柳のいと

水邊古柳 貞享元年十二月二十四日

水草おひてふりぬる池の柳かげおのれぞ春のいろはすくなき

故郷柳 同五年二月二十五日

とちはつるむぐらの門も来る春の道しあればや靡くあをやぎ

ふるさとの門のむぐらも来るはるの道やはとづる青柳のかげ

田邊柳 同三年二月十一日

あをやぎはまづ染めけりな賤の男が門田のおもにいそぐ緑を



賤のすむそとものやなぎ打ちけぶり苗代いそぐ小山田のはら

春色柳先知寛文十年正月十九日御會始

もえそむる園生のやなぎ春もまだ浅みどりなる色になびきて

若草延寶七年十月

木がくれはつれなき雪のしたもえも若草山のみどりにぞ知る

春草同六年三月二十九日

春あさき野邊の色かなかつあをむ雪間も今朝の霜のしたぐさ

春草貞享三年五月二十日

春さむみおく朝霜もこころせよまだうらわかき野邊の小草に

野春草同元年二月二十二日

時しありと見すや昨日の霜がれも若草おふる野邊のみどりを

そめわたす緑ぞはやき雪間より色づき初めし野邊のわかぐさ

行路春草天和三年

踏みしだく跡とも見えす道の邊に萌えていろこき春の若ぐさ

早蕨寛文十二年二月二十五日

咲きてちる思のほかにさわらびは谷にも春のをりえがほなる

春月同十三年八月二十四日

さやけさはかぎりこそあれ小夜ふかくかすむ憐を月に思へば

春月天和二年

かすめ月秋にくらべてなほざりに思ひおとさむ春のそらかは

春月貞享三年五月十九日

晴れやらぬ霞のとがのおぼろ夜を月にかこつもうきならひ哉

春月幽延寶四年四月二十五日

霞む夜のあはれも添はぬ月ならば曇るばかりになして恨みむ

春月幽元禄元年十一月四日

わすれては月にぞかこつ晴れぬ夜のうらみは春にふかき霞を



あはれ知る誰が心より春の夜のおぼろ月夜をながめそめけむ  
春曉月 貞享五年正月二十六日

名残なくかすみはてなむ空をしおぼろ月夜のありあけの影  
いかに見む時のまをだにをしむ夜の春の有明のつきぬ名残を  
春夕月 寛文十一年十二月

おぼろ夜のふかきあはれを梅匂ふゆふべの水の月にそへばや  
峰春月 同十二年二月二十五日

花の雲こりしく山のたかねよりかすみを出でてにほふ月かけ  
河春月 延寶二年二月十一日

月はなほうつるともなき河瀬にも波はかすまぬ音のさやけさ  
河上春月 貞享二年九月十一日

春の夜は吹くや飛鳥の河かせもただいたづらに月ぞかすめる  
春湊月 同三年二月十一日

うきねいかに月は霞のなみ分けて出づるみなとの春のふな人  
霞にはさはらぬものとみなと江の月も蘆間のかげぞすくなき  
獨見春月 寛文十二年十一月二十四日

深き夜のあはれもしらぬ身ひとつの軒端の月よ霞ますもがな  
春 曙 延寶五年三月四日

はなにほ（にほひ）ひ月にはひかり有明のあかぬことなき春のあけぼの  
春 曙 同五年六月四日

霞さへ夜をやのこさぬしろたへの花よりいそぐ窓のあけぼの  
春 曙 天和二年五月七日

いつよりもをしまむ春のひと時やただ月花のあけぼののそら  
春 曙 元祿三年五月二十五日

世はなべて柳さくらのあるしもや霞をめぐるはるのあけぼの  
いへばただ霞むばかりのいろにしも心をそむる春のあけぼの



江春曙 元祿四年五月十八日

たまつしまいつはありとも曙のはるの入江のかすみをぞ見む  
あけぼのの春のかすみに見まほしき入江の浪に玉つしまやま

遠浦春曙 貞享元年三月十四日

千重にしく霞のなみのあけぼのに浦吹く風もなざわたりつつ  
たぐひやはさらにもなみのみるめかる春の曙しほがまのうら

春曙眺望 寛文十年十月二十四日

みよし野やおくある山のみねつづき櫻にしらむ春のあけぼの

春 雨 延寶四年八月二十五日

庭の面は降るとも知らぬ春雨のあやおる水に見えてしづけき

春 雨 同年十月二十一日

ぬれぬれて花おもげなる軒端には音せぬ雨のいろも見えける

春 雨 貞享三年八月

春雨は降るともわかで暮るる日のかすみにしめる庭の眞砂地

朝春雨 元祿三年三月二十五日

佐保ひめのたが袂をか別れきてほしあへぬ今朝の衣はるさめ  
晴れまなき今朝の霞のなか空に知らでほどふる雨のしづけさ

春夕雨 寛文十三年三月二十四日

暮れにけり立ちそふ霞それも猶春のものとしてあかぬながめに

夕春雨 延寶五年二月二十二日

つれづれも思はぬ雨のゆふべかな明日のこすゑの花をまつ頃

夜春雨 天和三年四月二十四日

しづけしな音せぬ雨も聞くばかりいをねぬ夜半のはるの枕は

歸 雁 同三年二月二十一日

春がすみ霞みてもなほとりの道さはらぬものか歸るかりがね

歸 雁 延寶四年十月二十六日



いかでいつしはしとどめむ天つかり尾上の花の雲のかよひ路

歸 雁天和二年十月二十六日

慕ひ侘びぬ月にしらぶる琴の音もひきはとどめぬ雁の歸るさ

歸 雁同年

何かしたふこの曙の春をさへ見すつるかりのこころづよさを

歸 雁貞享三年五月十九日

秋にのみこころをよする雁がねや花の春しもかへりそめけむ

海歸雁元祿五年六月二十八日

越の海やさらでも春は行く雁のうらやむかたにかへる波かな

行く雁のつばさの波もかすむ日のみるめにあかぬはるの海原

湊歸雁同三年十二月二十三日

やどりせしかけの湊の蘆邊をも思ひおかすやかりの行くらむ

みたと江にとまらぬ舟のかぢ音や雁のつらねて歸るさのこゑ

歸雁遙 寛文十三年二月二十五日

こしの海やそらの海にもつづくかと雲の波分け歸るかりがね

春 駒元祿元年十月二十七日

難波江や萌ゆるみどりの草の葉におなじ蘆毛の駒あさるなり

若草のはるけき野邊を行きかへりいづこまでとかかける春駒

雉貞享四年十月二十五日

子をおもふ道やは知らぬ心せよ雉子鳴く野のはるのかりびと

淺羽野に朝なくきじの三輪小菅ねにあらはれて妻をこふなり

雲 雀寛文十二年二月二十五日

入日さす岡邊に落つるゆふひばり露さむからぬ床やしむらむ

鶴同十年十二月二十四日

春深きかすみに落つるゆふひばり床は草野のいづことか知る

絲 櫻同十一年六月二十四日



おなじくば梅が香なびけいとざくら柳に似たる枝のはるかせ

絲 櫻 元祿元年十二月二十五日

花の上にたれかなしまむ絲櫻いろにも出でよ染むるころは  
名もしるくつらぬきとめば絲櫻散るてふことも花に知らじを  
けふこそ櫻 延寶二年三月二十九日

散らばまた恨やそはむさかりなる今日こそ櫻おもひなくとも

花 寛文十二年六月二十四日

白妙の雪ものこらぬをりしもあれまがふ色なきみよし野の花

花 延寶二年二月二十四日

咲くを待ちし山鳥の尾の長き日も花にむかへば暮るる程なき

花 貞享三年五月十九日

とどまらで散るともよしや花盛待ちこしほどの日數なりせば

待 花 延寶四年二月二十五日

花にとくかぞへて見ばやつれなきの心くらべにうつる日數を

待 花 天和二年五月二十五日

待たで見む待つ生憎に咲きやらでつれなしづくる花もこそあれ

栽 花 延寶五年十二月二十四日

あやにくまになほぞつれなき櫻ばな心とどめて植ゑしみぎりは

栽 花 同五年六月二十五日

そでちかくうつし栽うるも松風のおなじ軒端や花にうからむ

栽 花 貞享三年八月

うつろはで久しかれとは宿に植うる花もあるじの心をや思ふ

尋 花 寛文十一年十月二十四日

花よいかに岩木なりとも岩根ふみ分けこし道のわりなきは知れ

尋 花 天和二年

おもかげに立てるやいづこ花と見て行けば跡なきみねの白雲



尋 花貞享元年三月十七日

今日はまた分けつくさじな咲く頃の山路は花に遠きゆくする  
山ふかき雲にや今日もまどはまし猶おもかげの花にそふとて

初 花延寶五年五月二十五日

待ちえたる片枝の花の色に香にしひてさかりを急がずもがな  
花始開 貞享五年三月二十九日

咲きそむるこの一ふさの色に香に花はさかりを比べても見む

花漸盛 延寶九年三月十一日

またもこむ片枝は花の咲きやらで明日のさかりを残す木蔭に

見 花元祿二年二月十三日

きのふ見し名残を今日の色香にて同じところの花にくらしつ  
見 花同四年正月二十五日

誰が春の心を世世にならひ來し見れども花にあかぬものとは

色も香も世世にふりせで咲く花はなほ幾春をあかなくに見む

翫 花貞享三年三月二十九日

花よ知れ木づたふ鳥の羽かせさへ思ふあまりに厭ふころを  
春風の吹けばおよばぬ袖をさへおほはまほしとむかふ花かな

馴 花寛文十一年二月二十四日

浅からぬ心なそめそ馴れ行かばこれも浮世の花にやはあらぬ  
われこそあれ馴れし幾世の春ぞとも花は思はむことわりもなし

交 花天和三年二月二十四日

胡蝶にもなれしや幾日花園の木のもと去らであくがるる身は  
かつ散るもげにあかなくの木蔭かな花の色香に袖をまかせて

交 花貞享五年八月七日

櫻がり暮れなばなげの下ぶしにあともまくらも花の香ぞする



よしの山うき世の春はよそに見つさながら花の雲にのりきて

花映日 元祿四年九月二十五日

たぐひなや春日うつろふ片岡のこすゑにあまる花のひかりは  
朝日さす軒端のさくらよそめにも磨ける玉のうゑ木とや見む

月前花 延寶四年三月四日

暮れそむる木の間に匂ふかげ見えて花にとられぬ春の月かげかな

花のしづくに 天和二年五月二十四日

折る袖ぞ濡れつつあかぬ雨ののものにほひこぼるる花の雫に

夕 花寛文十年三月二十四日

こころなく夕ぐれいそぐ入相のこゑにけたれぬ花のいろかな

暮山花 元祿二年正月二十五日

待てしばし花の蔭ゆくみ吉野はかへる山路の暮れぬともなし  
ふもとにて見しにもあらず吉野山かすみにまじる花の夕ばえ

深山花 寛文十三年三月二十四日

とはでやはあらしもゆるく枕ゆふこよひみやまの花と月とを

花満山 同十二年三月二十五日

山まゆのみどりもわかず佐保姫のかざしの花の色にむもれて

花満山 延寶八年二月二十日

行きて見ばふもとや散るも交るらし峯まで花は咲きも残らず

峯上花 寛文十一年三月二十五日

白妙のくも吹く風もにほふかと峯もいくへのさくら咲くころ

嶺上花 貞享五年三月二十五日

峯つづき花をひかりに明けそめて横ぐもしろきみよし野の春山  
こころして雲もかかるなかつらぎの高根の櫻よそにだに見む

遠嶺花 元祿三年九月二十五日

なほぞあかぬ雲ゐる峯に咲く花のたかまの梢まがふよそめはも



立ちまがふ雲吹きはらへ花の香のここには遠き峯のあらしも

水邊花 延寶二年三月二十四日

散らぬまも風のささなみさわぐにぞ花の鏡は曇るといふらむ

古寺花 寛文十一年二月二十五日

おしなべて山は櫻にこもりくの初瀬のかねのこゑにほふらし

依花客來 貞享三年三月二十四日

われにこそ思のほかの人めをも咲くより花はやどに待ちけむ

とはすと誰れを恨みむかくれ家に待ちよろこべる花の友哉

花下忘歸 寛文十一年三月九日

花のかげ月こそにほへ誰がやとにこよひ雲井の花にわすれて

花如舊 貞享五年八月二十五日

雲とのみ今ながめていにしへの春おもほゆるみよし野の花

寄花懷舊 元祿二年二月十三日

思ひ出づるむかしの春袖の袂の袖の香をたち花ならぬ花もしのにははめ

花半落 天和二年七月二十四日

(御製闕)

落 花 延寶六年三月二十四日

あやにくのことわりならば散り行くも惜まで見ばや花の心を

落 花 天和三年十月二十七日

あだなるを恨みもはてぬ花の上は幾春あかで散るを見つらむ

落 花 貞享三年五月十九日

なごりなほあかぬ櫻の木のもとに散るはな衣あすもきて見む

落花隨風 寛文十三年三月二十五日

花よいかにあひも思はぬ風にしも身を任せては仇に散るらむ

行路落花 同十二年三月二十四日

跡もなく散りしく花を吹きわけて風ぞゆくへの道しるべする



寄花神祇 元祿二年二月二十三日

あとたれしそのかみよりや花の時は花もてまつる三熊野の宮  
枝ながら手向の山のはるの花げに咲き散るもかみのまにまに

毎年愛花 貞享四年二月十四日御會始

年ごとの雲井のさくらあかなくに今ゆくすゑの春もきて見む  
花も知るやはたとせあまりいつよりも色まして見る百敷の春  
年を経て見しにもあらずよるこびの色をそへたる雲の上の花

志賀花園 元祿四年三月十七日

みやことて植ゑけむ花の色香にや世世咲きにはふ志賀の花園  
ささ波や鳩てる色もひとつにて朝日ににほふ志賀のはなぞの

花有遅速 延寶二年十二月二十四日

ふもとより散ればさくらの奥ふかき吉野の春ぞさかり久しき

野 遊 同九年

今日も又あかでぞくらす董咲く野邊のかすみに家路へだてて

野外遊絲 貞享元年三月二十四日

からにしき野邊の緑もかすむ日にあやおりみだる空（ま）の絲ゆふ  
手にとりて見るものにもが遠き野の草葉にかかる空の絲ゆふ

遅 日 天和三年三月二十四日

ひととせは程なきものよ春の日の暮るるま遅き空におもへば  
暮れがたき幾日の空に忘るらむとすれば春のうつりやすさも

春日遅 元祿二年九月二十五日

もししきや老せぬ門のながき日をのどかにおくるはるの家家  
花をめで鳥をうらやむすさびにも長き日あかぬ春のそらかな

三月三日 延寶九年上巳

をとめ子が今日は柳の花かつらかけて立ちよる桃の木のもと

桃花曝錦 天和三年



散るさくらあればをりはへ咲く桃に春の錦のなかは絶えせず

山梨花 元祿二年三月二十五日

木の間なき谷にも月のかげ見せて暮るる軒端のやまなしの花  
かた枝さす軒の春雨うちかをり住むいほふかき山なしのはな

石清水臨時祭 延寶四年八月二十四日

八幡やまやよひの今日の神わざにいとまなきしも櫻かざして

野徑菫 寛文十一年三月十五日

なつかしきゆかりの色とすみれ咲く紫野ゆき摘みてかへらむ

田 蛙 同十年三月二十四日

をしまるる春はいくかもあら小田に鳴くや蛙も聲のうらむる

田 蛙 貞享五年九月十七日

せく水のしたにもけたぬ思あれやつまよぶくれの小田の蛙は

蛙鳴苗代 元祿三年七月二日

おのが住む山田のはるを心にやまかする水のかはづ鳴くらし  
なはしろの水口さらず鳴くかはづなれも心のしめやかくらむ

夕苗代 貞享元年三月六日

みなくちを祭るかへさは暮すぎてかへる田長や道たどるらむ  
賤の男が小田の注連繩長き日の暮るるまでとや水まかすらむ

苗代水 同三年三月十四日

せき入れて苗代小田にまづぞ見る千町におよぶ水のころも  
春の田をこころにまかす民も知れ苗代みづのゆたかなる世は

雨後苗代 同年三月二十四日

雨ののち見れば門田の苗代にせき入れぬ水もあまりてぞゆく  
待ちえたる雨のなごりに程もなく水せきあまる賤がなはしろ

躑 躑 同三年五月二十日

思あれと言に出でてはとばかりや岩根の躑躅いろにこがるる



冬延寶五年十二月二十五日

またや見むこの夕づゆに咲きそひてまがき重げにかかる山吹

冬元祿二年正月六日

遅く疾く咲きつつ花に御本ノママふふきは八重も一重もあかずしぞ見る

夕款冬寛文十一年六月二十四日

やまぶきのまがきの花のゆふ露にねたる色さへまがふ蝶かな

河款冬同十一年三月二十五日

河波にながる春のいろ見えてうつり行く瀬のやまぶきの花

岸款冬貞享三年五月十九日

散りぬともかげだにとめよ山吹の咲きこぼれたる岸のした水

離款冬同二年十月十五日

とふ人に折りやつさるる山吹の花のまがきはゆふかひもなし

ゆく春も心のしめを夕づゆのまがきと見えて咲けるやまぶき

藤天和二年

花といへど松に契れる藤ならばあだに咲き散る外に見ましや

藤貞享三年八月

咲く藤のはなにまかする春を経てもとの木立も見えぬ庭かな

藤花盛延寶

紫のただひともと誰れか見む這ふ木あまたの藤のさかりを

藤花隨風貞享元年十二月二十四日

吹くほども見えて末こそ藤波にこゑうちそふる松のはるかせ

雨中藤元祿五年十月十六日

降る雨をうらむらさきの花の蔭しひて幾日と濡れつつや見む

降る雨にしをれぬ色はにほふとしひて幾日のはるの藤が枝

行く春のなごりも知らず降る雨をうらむらさきの花の下かけ

水邊藤寛文十一年正月二十七日



折りとればありしにまさる色香かな池の汀のふぢのしなひも

池 藤寛文十一年三月二十四日

あかずとよ藤のしなひの長き日も池のほとりの苔をむしろに

瀧下藤貞享二年八月二十四日

咲く藤の浪もあたりの岩こえてありしにまさる春のたきつ瀬

咲きかかる岩根の藤は瀧つ瀬のはやきこころも知らぬ波かな

路 藤同三年五月二十日

立ちよりにてかざし折らばや玉梓の行くてにあかぬはなの藤波

松 藤天和三年三月二十四日

咲く花にうづもれ残る松の色もうら葉にまがふ藤のたそがれ

住の江によせてかへらぬ藤浪はまつ吹く風のおとをかるらむ

名所藤同年九月二十三日

かすが山いく代の春のさかえをか松にもぎれるきたの藤なみ

田子の浦に咲けるを見ればわたつ海の春のかざしや藤波の花

暮 春寛文十一年三月二十四日

かがふれば彌生も今日にくればどりあやなく春の夢ばかりなる

暮 春延寶六年三月二十四日

花鳥の春もいまはの夕日かげかすむばかりをかたみなれとや

暮 春寛文十二年三月二十五日

行く春にしばしおくれで影なれし月だにしばし面がはりする

暮 春月天和三年八月二十七日

慕ひてもなにをか春のいろと見む青葉の山のありあけのつき

かすむともいく夜もあらじ有明の月にのこれる春もはかなし

暮 春藤同四年二月十二日

よそに見てかへるを春にかこちても咲く頃つらきやどの藤浪

花はみな散りしかたみのこするより春のいろかをのこす藤枝



暮春鶯 延寶二年五月二十九日

鳴きとむる花とやいはむ鶯の散るあとしたふこゑのにはひは

暮春鶯 同五年三月二十八日

またもとへ春は過ぐとも梅が香の形見なるべき宿のうぐひす

暮春聞鐘 寛文十三年三月二十五日

花につきぬ名残もそひて春はいま初瀬のかねの聲（音イ）やうらむる

暮春鐘 延寶二年三月二十四日

入相のかねてもをしむなごりゆる春日みじかきくれがたの空

春欲暮 元禄元年十二月十七日

いくたびの花に暮れぬるやよひ山今年もあかで春ぞ越え行く

あひ思はで散りぬる花のうらみあれや春は幾日も残る木蔭に

兼惜春 貞享五年五月二十五日

雲かせにあとをとどめぬ花鳥もおもひかおきし春のわかれ路

彌生山ありあけの月のかすみにも春の色香のなごりをぞ思ふ

春已欲暮 寛文十二年三月二十四日

つきはてぬ春のなごりよ花鳥を思ふばかりのわかれならでも

山残春 貞享四年九月二十五日

かへりにし古巢の山をもとむとも春は幾日のうぐひすのこゑ

かすみだになほ立ちとまれ彌生山やよや今はと春は行くとも

三月盡 同三年五月十九日

飽かずして暮るる名残に明日よりや今こむ春を待つ事にせむ

春天象 元禄四年八月二十五日

天みてる光にしるしあらたまの春にこもれる千代のはじめは

春 風 延寶二年二月二十五日

神がきにまづ咲く梅を吹きそめて花のいく木に匂ふはるかぜ

吹くかせも春のいろかのほかならず柳になびき梅ににほひて



春 風貞享三年五月十九日

四方の空のどけき春を待ち出でて五日の風も吹くときや知る

春 夕寛文十一年正月二十二日

のこる日にいろそふ花の山かげは夕ばえをしく暮いそぐなり

春 夜天和三年八月二十一日

かつ見るもなほあかずとて月花の春の幾夜をいねがてにせむ

春 山寛文十三年二月八日

萌えわたるひとつみどりに春はただ若草ならぬ山の名もなし

春山朝 元祿三年二月朔

朝づく日千とせの影をこの山にしめのうちなる春のどけさ

春日望山 貞享五年二月二十二日

宮居して今もあかずや水無瀬川ゆふべは春のかすむやまもと

あかずこそ今もみなせの宮どころ春やむかしとかすむ山もと

春 松元祿二年二月二十五日

花ならぬみどりにあかぬ春の色やかすむとをちの松の村だち

春はきぬ消えあへぬ雪もしらとりの鳥羽山松の花かとも見む

春松契 千年同年正月十一日御會始

いく千代とさかゆる蔭を契りおきてまつにかひある春の緑か

三千年の春待ちて見む名もしるき芝のみぎりの世世の松が枝

春神祇 寛文十二年四月二十四日

長閑なる御かげやあふぐ春日野の雪間を分くる今日のもろ人

春神祇 元祿三年二月五日

うけて猶わが國まもれきささらぎや千代の初卯の今日の手向を

春 祝寛文十三年二月八日

あひにあひぬ柳の絲のながき代に他の國までなびくためしは

陽春布徳 元祿四年正月十一日御會始



天地にあまねくみてる春のいろをただ花鳥のうへにやは見む

風光日日新 天和二年二月十二日御會始

賀壽見多治可是能登河名流朝旦空從門春野以路處處日遊久

朝な朝な四方のかすみも佐保姫の袂ゆたかにたちかさねつつ  
家家翫春 同四年正月二十四日御會始

待ちえてはたれもこころの花鳥にわが家の園の春やたのしむ  
待ちえたる春の園居に誰が宿もまづ咲く梅のかざし折るらし

春玉島河 寛文十一年

かすみ行く河瀬の月に玉しまの春のひかりはさだかにや見む

春玉島河 貞享元年八月二十四日

たましまやこの河上に吹きそめてこほりをおくる水の春かせ  
あをやぎのいとまもなしやぬきかくる玉島川の春のささなみ

春三輪山 寛文十一年冬

花はいついかに待ち見む三輪の山まだ雪ふかき春のこずるに



夏之部

首夏朝露 元祿四年十二月二十三日

春秋にあらぬをときと階のもとの花は今朝おく露に咲くらし  
春過ぎていくかも夏のあさつゆに咲く花めづる階のもとかな

首夏藤 貞享二年六月十三日

のこりけり春見し藤の花かづら這ふ木は夏のかげしげるまで

田家首夏 延寶三年六月二十五日

夏木立うつすみどりにとりそへて門田の早苗植ゑむとすらむ

林首夏 寛文十年六月二十五日

なごり思ふ花の林もをりにあへば夏をわか葉のみどり涼しき

林首夏 貞享二年六月二十五日

見し花のはやしの梢なごりなくみどりにしげる夏は來にけり

いつしかにみどりぞしげる昨日見し花の林はおもがはりして

林首夏 元祿二年六月二十五日

今年生の又かげそはむ夏も來ぬしげきみどりの竹のはやしに  
見し春のいくかもあらぬ花のあとに繁る林はおもがはりして

更衣 延寶八年二月二十五日

散るはなの後しもあかでなれ衣そめし色香にかへまくもをし

山家更衣 貞享三年二月二十四日

こころもやかへてをしまぬ山住はいとふうき世の花染のそで

貴賤更衣 寛文十二年四月二十五日

花に染めし袂こそあれ惜まじな色香も知らでかふるころもは

新樹 延寶六年四月二十四日

花の木は中にわか葉のあさみどり我れはがほにも匂ふ色かな

新樹 貞享三年五月二十四日



若葉さへあかぬ陰とは花に咲き紅葉に染むる木木をこそ見れ

新 樹元祿元年十月二十五日

花の木は春の色香のそれならで若葉を見るもあかぬかげかな  
名残なくしげる青葉のこす忍には見しおもかげの花も残らず

新樹朝風寛文十一年四月二十五日

薄くこき色をか葉の露見えてすすしくなびく木木の朝かせ

新樹露貞享四年六月七日

あさがしは若葉の露に風ふれてしげらぬさきも陰ぞすすしき  
夏木立わか葉のつゆのすすしさに花よりのちも風やいとほむ

山新樹寛文十年四月十九日

紅葉こそよそには見れど常磐山時しる木木のわかみどりかな

山新樹天和二年五月二日

つくばねの蔭いかならむ夏きてはなべてみどりの端山しげ山

花の木はそれとわかれて若みどりしげる端山の色ぞえならぬ

卯 花貞享三年五月十九日

行く春のやどりとりける籬かと思しいろかへす咲ける卯の花

卯 花同四年七月二十五日

折にあへば神まつるてふ袖の色にまがふ卯月の花のしらゆふ  
世を厭ふ誰が山里に咲きそめてあなうの花の名をも立つらむ

卯花似月同元年四月二十四日

白妙の月のかつらを手にとりて植ゑしばかりの庭の卯のはな  
卯の花は月のかつらの何なれや根ざしかよへる色に咲くらむ

薄暮卯花延寶九年六月二十四日

夕月夜もるかげよりも茂りあふ木のした白く咲ける卯のはな

溪卯花元祿五年五月十八日

谷の戸の日かげにやつく白妙の卯のはな垣根くれぬひかりは



夕月夜ひかり見えさす谷の戸にこころありても咲ける卯の花

路卯花 元祿三年二月十一日

雪を踏み浪をや分くる河ぞひのをかべに咲ける卯の花のかけ  
少女子がゆききに手折る卯の花やおなじかざしの玉川のさと

卯花作 延寶三年六月二十五日

春はなほへだてもあへず中垣に咲く卯の花もさくらいろなる

籬卯花 貞享五年二月五日

しげるてふ籬の夏もわすれぐさ雪間にかへす卯のはなのころ  
冬ごもるかきねと見れば卯のはなのおのが青葉もゆきの下草

葵寛文十二年四月二十五日

神祭る今日のみあれの世世かけて同じ挿頭かざしのもろかつらかも

挿 葵同十一年六月十五日

かみまつる今日かみしもの氏人もいはふ心はもろかつらして

山 葵貞享三年五月二十日

むかし誰れたねまきそめて神山の今日のみあれに葵とるらむ

葵懸簾 元祿四年四月十二日

たまだれのみどりの葵千代かけてかれぬ契のみあれ待まをつらむ  
たまだれのみどりかけそふ葵草みあれ過ぎぬる後もなほ見む

傾心向日葵 貞享二年

生ひそめし根ざしもあやし移る日の影にまかせてむかふ葵は

郭 公同三年四月二十一日

くもまよふ空にふり出でて時鳥さみだれいそぐ聲に鳴くなり  
人の秋にあはじとすれや時鳥かへるをいそぐ音のみ鳴くらむ

繼寛文十二年四月二十五日

むらさめの今夜すぐすな時鳥またも聞くべきをりはありとも

待郭公 延寶五年十二月四日



あけはてぬ雲（ゴイ）まに洩せほととぎす月に聞かずばあたら初音を

待郭公 貞享三年八月

いまは世にはつ音聞かせよ時鳥さばかり人のころつくさで

人傳郭公 寛文十二年四月十五日

時鳥聞きつと聞けば人わきてねたきものからまじるうれしさ

初聞郭公 同年

有明のつれなからぬも待つ程はほどとき過ぎぬ初音ともなし

雲間郭公 同年五月二十一日

待たれつる雲間のつきの時鳥もらすはつ音のそれもさやけき

曉郭公 延寶四年四月四日

時しもあれ有明の月に今こむといひしばかりのほととぎす哉

曉郭公 天和三年四月二十七日

ほととぎすなれも雲井の有明をしのびかねてや初音（ヒトリイ）なくらむ

聞きつとも知らでや過ぎし時鳥ほのかにもらすあかつきの聲

曉郭公 元禄五年七月十八日

横雲のころ留めぬわかれにも鳴くやそなたの山ほととぎす  
しのぶれど山より月の有明にさそはれ来てや鳴くほととぎす

暮時鳥 貞享二年二月十四日

ほととぎすさらに待てとや鳴き捨てし雲（ゴイ）よりそそぐ夕暮の雨

野郭公 元禄三年十月二日

ほととぎす鳴きつる雲を後に見て山遠ざかる野邊のあけぼの

海邊郭公 天和三年五月二十四日

聞きもらす聲もやあらむ波かせのさわぐ磯邊の山ほととぎす

舟中郭公 同年

かたらへよ棚無小舟行かたもおなじ波路に鳴くほととぎす

郭公 數聲 寛文十年五月二十四



つひに世にしのだの杜のもりそめて千枝のかす鳴く郭公かな

早苗寛文十二年五月二十五日

いつしかとみどりも添ひて若苗におもかげなびく水の夕かせ

採早苗延寶五年四月二十一日

幾町の田の面をひろみ今日もまた採らぬ早苗やなほ残るらし

早苗多同二年五月十八日

今日もまた早苗とるなり足引のこなたかなたに田子の聲して

薄暮早苗元祿四年十月十日

露見えてなびく早苗のすゑ葉より田の面のくれは秋風ぞ吹く

暮るるまで同じひかりに山かげは入日ののちも早苗とるなり

山田早苗延寶九年四月十一日

うゑわたす早苗のすゑ葉露見えて暮るる山田のあかぬ涼しさ

端午興元祿二年四月二十五日

いやしきもよきもわかすや菖蒲草玉にぬく日の袖のかをりは  
殿守の昔くやあやめの軒端よりおひかせかをる宮のうちかな

江菖蒲貞享九年六月二十五日

今日待ちておりたつ賤や濁江のうきをも知らで菖蒲ひくらむ

いかなれや渡れどぬれぬ江の水におふる菖蒲も深き根ざしは

沼菖蒲寛文十年八月二十四日

それとなき水草がくれもかくれぬの深き匂にあやめわかれて

橋延寶六年二月二十四日

こすのうちにくゆる煙もおなじ名のはな橋のかをり添ふらし

橋貞享二年九月八日

もししきに残るを思ふたちばなや名におふ袖の香に匂ふらむ

百敷のむかしの風をのこすとや袖のみぎりにはふたちばな

廬 橋寛文十一年五月二十五日



をりにあふ南のかせもこの殿の花たちばなにいとどかをりて  
たちばなの花散る軒端うちしめり雨のしづくもかをる夕かせ

廬 橋寛文十二年六月二十七日

百敷のむかしの道にたちばなのかげふむ袖もかへれとぞ思ふ

廬 橋延寶二年五月二十四日

あはれたが昔しのぶの軒端とか露もこぼれてにほふたちばな

夜 橋元祿四年十一月二十五日

ひと夜しくあやめは浅きうつり香の手まくらなれてにほふ橋

橋はむかしおぼえてうたたねの夢をいさむる香ににほふなり

夜廬橋 延寶九年五月四日

見る夢も忍ぶむかしにかよへとや夜はすがらに匂ふたちばな

夜廬橋 貞享三年五月二十日

身にしめて聞へもいらじしづかなる雨夜の軒に匂ふたちばな

夜廬橋 元祿五年八月六日

香に匂ふ折しもあかすたちばなの見ぬ世を忍ぶ夜のまなびは  
おもふ世にかよひてかをる橋やよるのまなびの軒のつまなる

閑庭橋 原本御製調據一本補

しのべとて誰れかはひとりたちばなの蔭ふむ庭にのこすそでの香

砌 橋延寶五年四月十三日

誰れとひて花ぞむかしのとばかりも哀（たし）を添へむ宿のたちばな

對橋問昔 元祿二年四月二日

そで觸れしはじめをとへばいにしへの常世をかけてにほふ橋

忍びあまり問へど答へぬ橋は見ぬ世をのこす香さへはかなし

廬橋散風 延寶三年六月二十五日

風はなほ心もなしな常磐木の名にたちばなもあだにさそひて

岡 橋寛文十年六月二十五日



あらましき岡邊の松の夕風をうらむらさきにあふち散るかまこ

里 栲 延寶四年十一月

あふち咲く垣根ぞしるべ訪ひよらむゆかりも知らぬ里の遠方

五月雨 貞享元年六月二日

五月雨はいま幾日ありてこの頃の空めづらしき雲間をも見む

五月雨はいくかまでとか久方の空のひかりを待つことにせむ

五月雨 同三年五月十九日

めづらしく晴れぬるやまの麓よりまた立ちのぼる五月雨の雲

日かすさへ見えもするかな五月雨にまさる音羽の山の瀧津瀬

五月雨 元祿二年二月二十五日

月も日もいつかはかけを三室山降るほど久しきみだれのそら

をやむまもまだ夏引の手をたゆみくり出す絲のさみだれの頃

霖 寛文十一年五月二十四日

今日いくか柚木引きすて斧の柄もくたすばかりの五月雨の頃

梅雨 久延寶二年五月二十九日

かぎりありと見えし雲間をまたとちて後も幾日の五月雨の空

夜 五月雨 貞享三年五月二十四日

名のみしてもる玉水のみじか夜も明けやらぬ頃の五月雨の宿

水 鶏 天和三年五月十三日

名残あれや叩く水鶏の聲のうちに明けなむとする楨の戸の月

天の戸のあくる夜いそぐ月をし叩く水鶏のこゑにまかせて

鶏 寛文十一年五月二十四日

驚かす水鶏もあやれやな月をこそまつのとぼそはささで寐ぬ夜を

夏 月 延寶二年五月二十四日

すすしさはしばしがほどの端居にて袖におぼゆる月の霜かな

夏 月 同四年四月十三日



照りそはむ光をそらにいそぐかとまだき秋なる月のすすしさ  
見るがうちに風さへそひて涼しさも秋にかよへる月の影かな

夏 月 延寶四年六月二十八日

しろたへの袖にかさねて夏しらぬ霜をかたしく月のしたぶし

夏 月 天和二年五月十一日

世に知らぬ秋やかよふと見る月のところもところ清く涼しき  
たとへける扇もえやはまねぶ<sup>がよ</sup>べき夏をわするる月のあきかせ<sup>した</sup>

雨後 夏月 延寶九年四月十七日

雨晴るるなごりの風に散るつゆも月にすすしき檜のしたかけ

外山 夏月 寛文十一年四月二十五日

明け易き月こそあかね外山なるまさきのかづら暮るる夜毎に

浦 夏月 延寶八年六月二十四日

浦とほくよせて涼しきなみのまも難波のあしのみじか夜の月

水郷 夏月 寛文十年五月二十四日

飛鳥川かはよど知らぬかげなれや流れてはやき月のみじか夜

山家 夏月 天和三年五月三十日

やまかせも秋ある松のした庵にみじか夜知らで見る月もがな

竹亭 夏月 元禄二年四月二十五日

軒ちかき竹の葉分のかげ見えて來ぬ秋かせをつきぞともなふ  
風そよぐ軒端の竹のよひごと月に月も葉わけのかげぞすすしき

朝折 瞿麥 同五年八月十四日

今朝の露おきぬるままの常夏<sup>の</sup>にをるひと花のいろや似ざらむ  
こころなく折らばぞ今朝の常夏におきぬるつゆの情おくれめ

籬 瞿麥 貞享四年六月一日

花見むと種やはまきし山がつのせばき垣ほに咲けるなでしこ  
さまさまに咲けるまがきの撫子は秋の花にもかずをくらべむ



夏 草天和三年十月二十七日

夏ふかくしげりにけりな草のはら分けこむ人の道もなきまで

夏草滋元祿三年八月二十一日

秋待ちて咲く花あらばいかが見むしげるをいとふ庭の草葉も  
名も知らぬ草葉をしげみ庭の面は秋咲く花を待つとしもなし

月前夏草天和三年八月二十七日

なつぐさのしげみが原をたづねてや秋まつ露に月やどるらむ

杜夏草寛文十年七月二十五日

花に見む秋かせちかし夏たけておいその杜のかげのしたぐさ

水邊夏草同十三年五月二十五日

露分くる夏野の草のむれ水くまぬたもとも濡るるすすしさ

鶺鴒 川同十二年五月二十五日

かがり火のひかりやそひて山かげの月を鶺鴒舟に思ひけつらむ

鶺鴒 川延寶四年六月二十四日

うかひ人思へかがりの影ばかり燃えてしづまむ波のうき瀬を

鶺鴒 川元祿二年六月十七日

うかひ舟さすかげうすき夕月の渡瀬河イさやかに照らすかがり火  
闇ふかき夜河にはなつうきわざを身にわすれても篝さすらし

鶺鴒 川 延寶四年四月十三日

うかひ舟月は入江のあし間よりこれも涼しきかがり火のかげ

鶺鴒 川 天和二年五月七日

いつしかとほのめき出づる篝火や暮を待ちける鶺鴒舟なるらむ

遠近鶺鴒 川元祿五年四月十二日

いざなはぬ遠里人の鶺鴒火もこのかはづらに見えてうかべる  
ここに燃えかしこに浮ぶ篝火はいく瀬へだつる鶺鴒舟なるらむ  
遅く疾く出でし鶺鴒舟のほど見えて瀬瀬をへだつる篝火のかげ



深山照射 寛文十三年五月二十五日

山みづの木がくれはてぬ思をばともしに鹿のよるや見すらむ

峰照射 貞享五年四月六日

身を捨つるおのが思もしかばかり燃えてやたぐふ峰の照射に  
よる鹿を松の火串のさすがまたあはれと見ずや峰のさつをも

深夜螢 寛文十年六月七日

ともし火も消えて夜ぶかき窓のうちにひとり螢の光さやけき  
よるはほたるの貞享二年十月三日

瀧津なみよるはほたるの光をもみだるる玉と見てやひろはむ  
おもひ出によるは螢のひかりもて書みし窓のくからぬ身を

水邊螢 天和二年三月四日

暮るる夜は瀬瀬の螢のおのれのみいはうつ波の玉とみだれて  
暮れそむる河邊のほたるかげ見えて水草きよき風わたるなり

水邊螢 天和三年冬

さそはれて行くやいかなる思川身をうき草にあらぬほたるも

蚊遣火 延寶九年六月九日

よそにたく煙をいとふ軒端にもたえずや立つる賤が蚊やり火

蚊遣火 天和二年五月二十五日

たきすさぶ煙や聞にうすからし臥すかとするばすだく蚊の聲

蚊遣火 貞享三年八月

たきそふる思もさぞなところせき宿にふすぶる賤が蚊やりは

蚊遣火 同四年六月一日

賤の男がぬるまをいつと夏の夜のみじかき軒に立つる蚊遣火  
すだきよる聲をくるしみ夜もすがらする業ならし賤が蚊遣火

蚊遣火 元祿四年八月二日

暑さをもしばしたゆめて蚊遣火のけぶりふきやれ聞の小夜風



いを安くいかで伏屋の暑き夜にいぶせさそへて蚊遣たくらむ

遠村蚊遣火天和三年五月二十四日

山もとの蚊やりの煙よそにても下やすからぬおもひとぞ知る  
山かせの涼しきくれも蚊やり焚くおもひやけたぬ遠の里びと

閑居蚊遣火貞享二年九月二十一日

徒然のすさびにもあらぬ蚊遣火に猶いぶせさを侘ぶる宿かな

蓮寛文十三年六月二十五日

はちす葉のよしや濁にしまざらば浮世のうさも知らむ物かは

荷 露延寶三年六月二十四日

見るがうちも涼しく露ぞまろびあふ漣波こゆる池のはちす葉

氷 室貞享五年四月二十五日

誰れしかも夏なき年をおくるらむ氷室もるてふやまの常蔭に  
水無月や照る日の本のほかならで氷室もるてふ山やいかなる

夕 立 延寶五年三月十四日

夕立しなごりもすすしひとむらの雲ゆくあとの山はみどりに

夕立早過 貞享九年六月二十五日

雲かせはほどなく過ぐる夕立のなごりもあかぬ軒のしたつゆ  
涼しやとむかへば晴るる夕立のほどなき軒にもる日かげかな

遠夕立 天和二年六月二十四日

いく里の日かげにや待つ雲かせのゆくてすすしく見ゆる夕立

嶺夕立 貞享二年九月十九日

夕立にぬれしころもやのこる日のみねにかけほす天の香具山  
見るがうちに過ぐるや千さと峯つづき風にきほへる夕立の雲

河夕立 元祿三年二月二十五日

水上のひとむらくもる夕立にいはなみはやくにこるやまかは  
浪たたぬふちさへさわぐ夕立にやがてこゑそふ賀茂の河みづ



村夕立 貞享二年十月十五日

吹く風もはやしの梢うちなびきゆふだつ雲のひとむらのさと  
行く雲はとをちの村のゆふだちにこの里わかぬ風のすすしき

雨後蟬 延寶二年十二月二十四日

雨はるる名残の露にところ得てしげきにきほふ蟬のもろごゑ

山路蟬 貞享五年六月二十五日

蟬のこゑ木木にすすしき夕かげの駒もすすみて行く山路かな  
鳴く聲もしげき木かげを分けくれて山路涼しき蟬の羽ごろも

杜 蟬 寛文十年六月二十四日

日ぐらしの鳴く夕かげは杜の名のけしきに近き秋も知られて

杜 蟬 延寶四年五月四日

鳴くせみの聲もみだれて風たかき杜こそ夏も知らぬすすしき

杜 蟬 貞享三年五月二十日

夕づく日かげろふ杜の木がくれに露をもとむる蟬や鳴くらむ

樹陰蟬 延寶九年六月二十四日

秋待たで木木のしづくも散るばかり蟬鳴きくらす陰の涼しき

晩夏蟬 天和二年六月二十四日

こゑのうちに夏やくるらむ鳴く蟬の端山のかげは秋風ぞ吹く

納 涼 寛文十二年六月二十五日

夕かせの清くすすしき端居にもなほあかすこそ月は待たるれ

納 涼 月 貞享三年六月二十五日

夕すすみ暮るれば月を待ち出でてよるも端居のあかぬ頃かな  
袖のうへも夏なき霜の色ふけて身にしむばかり月ぞすすしき

麓納涼 天和三年六月二十四日

ふもとゆく袖ぞ涼しき山かげのこすゑはのこる日影ながらに

泉 寛文十三年六月二十五日



月もすむしみづがもとは夏としも知らぬながれに枕しつべし  
松下泉 元禄元年十二月十七日

清水せくいは根のおち葉かきはらひ涼しきくれを松のした蔭  
夏とやはいはるの清水松のかせ千代も經ぬべき陰のすすしさ

近水微涼生 貞享二年

袖に待つほどさへすすし浮草のする葉をわたる水のゆふかせ

夏 祓 延寶二年六月二十四日

みそぎ川 夏はゆくせの夕なみや秋をさそひて立ちかへるらむ

夏 祓 寛文十二年六月二十五日

河波の立ちくる秋もあすか風そで吹きかへすみそぎすすしき

瀬夏祓 同年

いかで今日みのうき波を立ちかへて嬉しき瀬にも御禊してまし

夏天象 寛文十二年五月二十四日

いつ晴れむながめともなく雲とちて五月の空はかきくらす頃

夏 日 延寶二年六月二十二日

雨もよに今日の日も又曇るより暮るる待つまはせめて涼しき

夏 風 寛文十年六月二十五日

かげたかき松ふく風もひとこゑの秋をしめ野のゆふべ涼しも

夏 雨 延寶二年六月二十二日

たちぬれぬ袖の暑さもあらふかと風さへそひてきほふ雨かな

夏 晝 元禄二年四月二十五日

過ぎて行くかげを惜まばあつき日も怠りがちの晝寐せましや

涼み來しあしたゆふべの中空に照る日は残す木がくれもなし

心なき草木もたへぬあつさとや露のひるまを見せてしをるる

夏 山 寛文十二年六月二十五日

花紅葉ほかのものは夏やまのしげるこずゑに何かうとまむ



夏 野寛文十二年六月二十五日  
かる人の道なきまでやしげるらし駒もすさめぬ野邊の草はら

夏居所 同年五月二十四日

卯の花のかきねしわたしことさらに山里びたる住居さびしも

夏 木同十一年四月二十九日

神まつる卯月の花のしらゆふはかけてをりから枝たわむまで

夏 杉貞享三年二月十二日

郭公ころのまつは見えずとも立てる軒端のすぎがてに鳴け  
五月雨にふりはへとはむ人やはと待たでいく日を杉たてる門

夏 鳥延寶五年五月二十一日

つれなさのまさりがほにも有明の月出でて後鳴くほととぎす

夏 雜物寛文十二年五月二十四日

草葉だになびかぬくれの風なれとならす扇の手にはまかせて

夏 筵 同年六月二十六日

更けゆかばきりぎりすもや聲そへむ霜おく夏の月のさむしろ

夏 衣 同年

まだきよいかさねまほしき夏ごろもひも夕かせぞ袖に涼しき

夏 絲 寛文十一年四月二十九日

ねや近く蚊のこゑほそき片絲のよるよるむすぶ夢ぞみじかき

夏 色 同年六月二十五日

冴ゆる夜の霜よりしろく夏しらぬ真砂の月のひかりすすしき

夏 香 同

はちす葉の露吹くかせも池水のにごりにしまぬ香に匂ふなり

夏 聲 同

あらましく降る夕立の雨もよにひびき添へたるなるかみの空

夏 旅 貞享三年五月九日



薦かへで繁る若葉に分けかねてむかしおぼゆる宇津の山みち  
旅ごろもたちよる袖のすすしさに野中の杜のかげぞ過ぎうき

夏 祝寛文十年六月二十五日

いにしへの風をうつして民のくさとる手になびく姿をも見む

夏 祝同十二年四月二十四日

見ても思へ世は折ふしも若竹のなほきをあぐる風のすがたを

夏 牧貞享五年三月二十五日

秋ちかきみつ野の螢いつまでの身をかりごもに思ひみだるる  
まこも刈る跡とも見えぬ夏草にみつ野の駒のこゑばかりして

秋之部

立秋 曉 貞享五年九月二十五日

一年のなかばおどろくあかつきの夢のただちに秋は來にけり

立秋 曉 元禄二年九月

露もまだおきあへぬ床のしののめに來る秋しるき袖の涼しさ

初 秋 寛文十二年六月二十四日

今朝のあさけ一葉をあもいさそふ秋風に目にさやかなる露も亂れて

初秋 月 元禄五年七月二十五日

夜ごろをもまだへぬ秋の露のまに月のかつらの枝は染めけり

初秋 風 延寶四年二月十三日

木の間にはまだ聞きわかぬ秋の聲を待ちとる萩の今朝の初風

初秋 風 同年六月二十四日



このごろの涼しさながら身にしむはこれやまことの秋の初風  
初秋風 貞享元年十二月二十四日

萩のおと桐の一葉のうへに今朝見せも聞かせも秋のはつかせ  
吹きかへて今朝ぞ身にしむ秋の風待ちこし袖も厭ふばかりに  
河初秋 寛文十一年八月二十四日

立ちあへぬ秋さへしるく吹きかはる河は音羽のなみの初かせ  
早 秋 貞享三年五月十二日

露見えてなびく浅茅の末葉よりまづいろかはる秋のはつかせ  
おき初むる露の浅茅生うちなびき秋たつ風のいろぞ身にしむ  
早秋露 同年三月二十四日

秋かせはさそはぬ露もこのあさけ桐の一葉とともに散りつつ  
朝まだきまがきに秋のいろ見せて初かせいそぐあさぢふの露  
新秋露 元禄五年九月二十一日

秋きぬとまづしる露の四方に今朝ちらすば桐の一葉をも見じ  
こころなき草木に秋を知らすとや今朝おく露の袖をよくらむ  
早涼到 延寶四年七月二十四日

露しろき夕日がくれの浅茅生や風も待ちあへず秋にすすしき  
早涼到 同九年七月九日

吹く風も身にしみ初めて夕月夜にしこそ秋のいろはしるけれ  
早涼到 貞享四年十月二十五日

昨日までたち待たれたる袖の上にこのゆふぐれは秋風ぞ吹く  
残 暑 寛文十三年七月二十四日

吹くもまだ秋かせぬるみ手にならす扇のさそふ涼しさもなし  
残 暑 貞享元年七月二十四日

涼しさはいつとか待たむ今日もなほ袖のよそなる秋の初かせ  
残 暑 同三年五月十九日



秋かせはいつ袖ふれむ閨の戸のおせどもさらず残るあつさに

七夕雲 貞享五年九月十七日

天の河かよふ舟路にいとほめやおよばぬ雲のなみのさわぎは

七夕地儀 寛文十一年

ちりひぢの山よりたかく星合のまれのひと夜も秋につもらむ

かはりゆく淵瀬も知らじ天の河あだなみかけぬ星のちぎりは

七夕後朝 同年八月十三日

朝つゆに濡れこそ添はめ七夕のおきてわかれし雲のころもは

七夕草花 天和三年七夕

七くさにそふる手向はうけよかし今日の言言葉のイの葉花ならずとも

七夕撫琴 延寶四年七夕

今日にあひて心ことなる調しらべとは河のつつみやうつたへに聞く

乞巧奠 貞享元年七夕

いそぐそのころや手むけほしあひの影まちふかす雲の上人

星河秋久興イ 延寶八年七夕

世世の秋かけてやたえぬ天の河としの一夜をたのむあふ瀬も

二星契久 貞享三年七夕

天の河いまゆくすゑのあふ瀬にもとほき神代の秋やかぞへむ

天の河すゑもたえじな神の代にさだめおきける秋のあふ瀬は

織女待夕 同二年七夕

われながら星やうらやむ天の河くれ待つほどに通ふところを

一とせを待つにもたへし心もて今日さへ星のくれいそぐらむ

霧織女衣 寛文十年七夕

これやこの天の羽ころも霧こめて明くる夜をしむ星合のそら

うらみあれや天の羽衣ころもまた初秋ぎりのうすきちぎりは

織女契 同十一年七月二十五日



天の河もみぢのはしは世世かけて絶えぬ契のいろに出づらし

今宵織女渡天河 延寶三年七夕

天の河としのわたりのとは妻やこの夕なみのたちる待ちけむ

牛女悦秋來 寛文十二年七夕

秋は来て一夜二夜をさらにまたいつかと星や待ちわたりけむ

代牛女述懐 天和二年七夕

あはれとや星は見るらむ人ごとにかくる願のいとかたき世を  
うらやむもあればある世をつけてだに慰めましをまれの星合

銀河月如船 延寶二年七夕

天の河わたせさやけき夕月のひかりやほしのつまむかへぶね

烏鵲成橋 寛文十三年七夕

今日ごとにかすてふ橋はかささぎの羽をならぶる契絶えじな

聞 萩貞享三年五月二十日

吹くも唯かごとばかりの秋かせを軒端の萩のおとに立つらむ

江 萩同元年七月二十四日

住の江やほに出づる萩のすゑ葉より松にもかはる秋風のこと  
夕づく夜入江のなみの秋かせにあはれをつくす萩のおとかな

萩似人來 延寶二年七月二十五日

風吹けばそよ待つ人とおどろくもならはぬからの宿の萩はら

萩似人來 元祿三年八月二十五日

今宵たぐるすの小野のとばかりも聞けば嵐の萩に吹くこゑ  
待つ人のそれかとまがふなぐさめも馴れてかひなき萩の上風

萩半綻 延寶四年七月二十四日

まだ咲かぬ片枝もあれや宮城野の本あらの小萩花もまばらに

萩半綻 元祿四年七月八日

咲き咲かず枝わく萩の花の色に今朝おく露もなかば染むらむ



おなじ枝をわきてや露のとばかりに咲ける咲かざる花の村萩

萩 露 貞享三年五月十九日

咲く萩の上のみだれてみやぎ野の木の下露もいろかはるころ

萩 漸盛 寛文十二年七月二十五日

思ふぞよ明日のさかりのいかならむ昨日に勝る今日の真萩に

野 萩 延寶五年二月十三日

よりあはせて織るや絲はぎ絲すすき花野のにしきいま盛なり

野 野 徑 萩 貞享二年二月二十二日

わけ濡れて色こき萩のすりごろも露のみだれもあかぬ野邊哉

過ぎがてにあはれとぞ見る紫のいろにかよへる野邊の萩はら

野 野 徑 萩 同四年五月二十八日

みやぎ野の露わけ衣たてぬきにみだれてすれる秋はぎのはな

露けさやなほあかなくのかり衣あさゆく野邊の萩がはなすり

原 萩 同元年二月二十五日

真萩はら花にうつろふ露わけて袖もいろなるみやぎ野のあき

おく露のちぐさにうつる心をやうらむらさきの野邊の萩はら

行路萩 寛文十年七月二十四日

心あらばはらはむものかあともなく誰が露わけし野邊の萩原

行路萩 延寶九年七月二十四日

花にぬれ露にうつろふ袖と見て分けこそあかね野邊の萩はら

萩 映水 同八年二月二十五日

水のあやにそこのかげさへおりはへて錦をたたむ風のあき萩

崎 萩 元禄元年十一月七日

舟よせて見しはわすれし真萩ちる野島が崎のあきのゆふなみぐれ(イ)

身におはぬ野島のあまの袖の色やすすろに染むる萩の花すり

女郎花 寛文十一年七月



あだなりし誰が秋かせに女郎花むすびもとめぬ露みだるらむ

女郎花 延寶三年八月二十七日

しらつゆのたまかつらして百草のなかになまめく女郎花かな

女郎花 貞享元年七月八日

女郎花なびきなはてそおきとめぬ露のこころはあだの大野に

女郎花 同年三月八日

女郎花なにあだものの露にしもこころ弱くてなびき初めけむ

野 薄 延寶八年六月二十五日

おきまよふ露もほにいでて初尾花秋のさかりを急ぐ野邊かな

薄 爲 薄 貞享三年二月二十八日

秋のみぞ荒れまく圍ふ茂りあひてもとの垣根を見する尾花に  
そをだにとたのむ尾花が袖がきを吹きなあらしそ宿の秋かせ

薄似袖 延寶七年十月

分けすぎる袖のよそめやまがふらむ尾花も白き野邊の夕ぐれ

岡刈萱 貞享五年六月二十七日

しづの男が刈りあへぬまの下折に分くるみちなき岡のかや原  
岡の名のゆききの袖にみだれつつ下葉にとめぬかるかやの露

蘭薫風 天和二年五月二十五日

藤ばかま咲くむらさきの一もとにみながらにほふ庭の秋かせ

草 花 寛文十三年七月二十五日

あるは恨みあるは招くも身に知らぬ尾花くす葉の野邊の秋風

風前草花 同十一年八月二十四日

野分たつこの夕ぐれは露ならぬこころも花のうへにみだれて

秋 花 元祿二年五月二十五日

これもまた色のちぐさの秋かせに花をおもひの露ぞみだるる  
露にだにうつるを惜しと見る花のまがきもたわに秋風ぞ吹く



風動野花 元祿五年八月二十五日

萩が枝に待ちとる野邊の秋かせや千種ながらの露を吹くらむ

秋・曉露 貞享四年六月十三日

おき出でて見ざらむ露のひかりかは有明のかげのうす霧の庭  
ありあけの影にまがへて白妙のひかりをしける浅茅生のつゆ

露 脆 寛文十年八月八日

あさがほはしをれもはてぬ秋風に花よりけなる露ぞこぼるる

悲 露 貞享三年五月二十日

おきとめぬ露の心をあはれとは誰が袖よりかおもひきぬらむ

竹 露 同年同月十九日

さ枝よりこぼすと見るもうけたためて竹のしげみに深き露かな

枕 露 天和二年九月十五日

夢さそふねやの秋かせ身にしみて結びかへたる手まくらの露

身を秋のおもひは知らじ深き夜の露をかけたる閨のまくらも

尋 蟲 天和二年七月三日

里人はいまも嵯峨野の露わけてえらびやすらし蟲のこゑせうこゑ  
松蟲の名をとめきても尋ね侘びぬ草のはらなる露のやどりは

遠尋蟲 寛文十年七月二十四日

遠き野のかせもしのばむ葛の葉のとはぬ恨にむしもこそ鳴け

野外尋蟲 貞享二年七月二十四日

今こむと頼めぬ野邊に鳴く蟲もまつとし聞けば言とはれつつ  
おのが名のまつとも知らぬ蟲の音に誘はれ來つつ辿る野邊哉

曉更蟲 寛文十一年七月二十四日

ありあけのつきせぬ秋の思をやおのれひとりと蟲の鳴くらむ

田家蟲 元祿二年二月十七日

いつまでの陰をたのみて秋の田のかりほの露に蟲は鳴くらむ



秋の露夜な夜なさむき小山田にいほりさせてふ蟲も鳴くらし

床 蟲 元祿五年正月二十五日

夜どこねに馴れてもうとし蟋蟀あひかたらはぬ秋のおもひは  
露をしく床やはかはるよるの蟲あはれ草葉のほかもとむとも

松 蟲 延寶四年七月四日

いはしろや松の名だたる蟲ぞ鳴くこの夕露のをかのくさねに

海邊秋風 貞享二年七月二十四日

今もたれうき秋風の須磨の浦にまたなき浪のあはれ知るらむ  
身にぞしむ淡路の島の夕なみにつれて吹きこす音のしほかせ

曉聞鹿 寛文十一年七月二十五日

見てもおもひ聞きても哀ふかき夜の有明の山に鹿ぞ鳴くなる

夕 鹿 元祿二年正月二十五日

夕づく夜鹿鳴くやまの嶺にだにづくも秋と住めば住むらむ

身をあきのわが袖よぎよ小男鹿の鳴く音露けき野邊の夕かせ

深夜聞鹿 貞享二年九月二十四日

ふくる夜を牡鹿のこゑも哀とは聞きだにいれず妻やつれなき  
おのがつま待つ夜ふけゆく恨をも語るに似たる小男鹿のこゑ

聞 鹿 寛文十三年七月二十四日

聞く人のたへぬ哀をおのが上にさしも知らでや鹿は鳴くらむ

山 鹿 天和三年十月二十七日

ながき夜をひとりはねじと山鳥の尾の上の鹿や妻こひて鳴く

外山鹿 元祿二年五月二十五日

まさき散る秋をかなしみ鳴く鹿のこゑ聞く庵は外山ともなし  
外山なる真拆のかづらよるごとに妻こふ鹿の音を絶えず鳴く

谷 鹿 寛文十三年七月二十五日

谷かげの松はつらくて山びこのこたへを友としかや鳴くらむ



野 鹿 貞享三年五月二十日

あかつきは夢野の鹿のそれならで妻とふ聲もあはれとぞ聞く

海邊鹿 天和二年七月二十四日

なみかけぬ袖もぬれけり牡鹿鳴くいそ山かげの秋のかり寐に

田 鹿 延寶四年十二月二十四日

小男鹿もたへぬおもひや秋の田のほに出でけらし妻ごひの聲

田家鹿 貞享三年五月十九日

守りあかす賤が門田のいねがてに幾夜かなるる小男鹿のこゑ

鹿隠萩 同四年十二月二十五日

咲く萩の下にかくれてふす鹿もいろにみだるる妻ごひのこゑ

たがならぬ妻しある野と咲く萩の花にこもりて鹿や鳴くらむ

鹿驚夢 寛文十二年七月二十五日

聞きわぶる誰れ夢も見む更くる夜を牡鹿の妻を戀ひあかす聲

鹿聲近枕 天和二年二月二十五日

夢うときいく夜の友となりぬらむまくらの山の小男鹿のこゑ

篠分くる音もさやけし小男鹿のこゑよりさむる夢のまくらに

故郷秋夕 貞享三年五月十九日

誰が袖もぬれてひがたき夕づゆにふるさと人の秋をとばばや

秋田露 元祿三年十二月二十三日

もる袖のしめりなそへそ夕づゆの稻葉にぬるる小田の秋かせ

夕されば月まつ露もおくて田のいなばの風にこころして吹け

月 寛文十一年六月二十四日

ながむるに物思ひまさる我が心さこそ知るらむ月もやさしき

月 同十二年七月二十四日

むかはむも思へばやさし世世の秋めでてみはしの雲の上の月

月 延寶二年二月二十四日



見るままに曇りみ晴れみ秋の夜の長きおもひをそふる月かな

逐夜月明 貞享五年七月二十五日

こよひはと見し夜な夜なを思ふには月のさかりの空に久しき  
露しにも染まぬ桂のみち葉も照りそふ月の夜な夜なのかげ

待 月同元年三月十三日

宵の間のながきも秋にかこてとや待たれておそき山の端の月  
よひ過ぐる心づくしや慰まむ待ち出づる月は木の間なりとも

待 月元祿二年八月二十五日

秋の色はながめじと思ふゆふべだに暮るれば急ぐ山の端の月  
惜まれて待つよひ過ぐる月ならば山のあなたの秋をうらみむ

秋見月 貞享二年八月十七日

長しとも知らぬながめに明くる夜をいづくは秋と月に託ちて  
雲の上にするを友と見る影やわが身ひとつの秋の夜のつき

閑見月 貞享四年八月二十五日

見るがうちに我が心さへ澄みはてて月にぞ身をもおもひ慰む  
物もいはで唯つくづくと向ふ夜の月こそ世をも思ひ知らすれ

獨見月 寛文

年をへて思ひぐまなき月見てもせめてものいふ友だにもあれ

稍傾月 同十一年九月十三日

更け行けば更にぞをしき今宵ありと最中の月にいひし名残も

三日月 同十三年八月十五日

なか空にしばしも見ばや三日月の入るかたちかき西の山の端

新 月天和三年五月二十四日

秋よなどがめもあへぬゆふべより月は木の間の思そふらむ  
この夕身にしむ影をはじめにていく夜の月にあくがれなまし

夕出月 延寶四年八月十七日



いつしかと山を出でて暮れぬ間のうすき光ぞ月にわりなき

上弦月 貞享元年六月二十四日

ぬる鳥もおどろきぬべし暮るる夜の木の間もりいる弓張の影月し

やよや待てまだ宵過ぎぬ山の端におしてかたぶく弓張のつき

十五夜月 寛文十年八月十五日

名にしおふ今宵やちしほ照りまさる月のかつらの秋の紅葉ばしも

わきて見むちしほやこよひ大方の秋にいろそふ月のかつらも

十五夜月 延寶二年八月十五日

曇るなよよし曇るともみてる名の月にかくれむ今宵ならねど

十五夜月 貞享四年八月十五日

名を四方に光をそらにみてる夜の月には月のいつをくらべむ

八月十五夜 延寶三年八月十五日

名もしるくそふやいかなる光ぞと今夜の月の夜ごろにも似ぬ

居待月 寛文十年九月十三日

よりゐつつ待つ宵ふけぬ月にうき雲もあらしの横のはしらに

十三夜 元祿五年九月十三日

いにしへのひかりながらやわが國の秋にのこれる長月のかげ

今宵見る月はなかばの秋をさへ忘るばかりの名にしおふかげ

十三夜月 寛文十三年九月十三日

見し秋のもなかよりけに置く霜のりもしろきを後の月のさやけさ

十三夜月 延寶三年九月十三日

十日餘みてぬものから名にしおふ月はなかばの秋もやは見し

十三夜月 同四年九月十三日

またたぐひなかばの秋の光にもまさ木のかづらなが月のかげ

十三夜月 同七年九月十三日

秋風もみがきそへてよ玉くしげふたたび月の名にしおふかげ

靈元院御集 卷一



九月十三夜 天和三年九月十三日

唐土に知られぬのみや名にしおふ今宵の月の隈にはあるらむ  
見よや見よ今日の今宵をつげずとも空にかくれぬ長月のかげ

月前風 貞享元年九月十三日

秋風の夜寒もこれをはじめとや身にしむいろの月に吹くらむ

月前露 延寶二年九月十三日

更け行けば野もせに月の影見えてはるるおもひの霧のした露

終夜月 同四年八月十七日

明けぬらし鳥の八聲はみだれ尾の長き夜あかぬ月はさながら

夜雲收盡 月行遲 同九年九月十三日

更くる夜の秋かせきよく雲きえてひとり空行く月のしづけさ

山月明 元祿五年三月二十五日

出づるより山ぐち見えて照る月に迷ふあたりの雲も消えつつ

さやけさは雲吹きつくす山の端のあらしを分けて出づる月影

嶺 月 寛文十一年十月二十四日

雲かかる峰の松原さはりおほみ待ち出づる月の思ひくまなき

嶺 月 貞享五年七月二十五日

恨むなよ待たれし山のあなたには見ざらむものを嶺の月かけ

野 月 同三年五月十九日

隈もなき野原の月に草まくらむすびすててやなほもゆかまし

原上月 寛文十三年九月十三日

月やどる野はら篠原つゆわけて飽かぬたもとの萩がはなすり

橋 月 貞享三年八月

心とやころもかたしき宇治橋のながき夜あかぬ月にあかさむ

水邊月 天和二年二月二十二日

影やとす水のころは早き瀬のなみにとられぬ月のしづけさ



さざれゆく水音きよし更くる夜の月もちりなき影をやどして

月照流水寛文十一年八月二十五日

行く物はかくこそありけれ川水にひかりとどめす月も流れて

江 月元禄三年九月十二日

思ひやる心をのする舟もあれな玉しく月のみまくほり江に

江上月延寶二年十二月十九日

見てもまた見まくほり江にゆきかへる幾夜かおなじ月の友舟

瀧 月同年五月四日

瀧津瀬の中にもありても流れ行く月にしばしのよどやなからむ

河邊月元禄四年八月二十一日

飽かすとやみなれそなるるかつら人ふねさす棹の長き夜の月

更けぬるか水なき空もひとつ色に月をやどせる秋のかはづら

海邊月寛文十三年八月二十五日

心ある蟹や我が身をうらにすむ月のみるめもかりそめにしして

海邊月延寶四年二月四日

心さへ須磨のうらなみうちたえて月の夜ごろは夢や見ざらむ

湖 月天和二年二月二十四日

出づるよりくもらぬ月のささなみに山や鏡の名をみがくらむ

ありそ海や濱の真砂地おきつなみ千里にしろき月のかげかな

湖上月貞享三年五月二十日

雲きりも海吹く風のあと晴れてにほてるひかり月にそひつつ

渡 月天和三年二月二十四日

こよひ誰れすみだ河原のわたりして都のあきを月に戀ふらむ

またこむもとほきわたりぞ天の河一夜はあかぬ月にあかさむ

渡 月貞享三年五月二十日

いづみ川かはせの小舟さすほども遠きわたりの月にあかして



古寺月寛文十年九月十三日

鐘も思へ飛鳥の寺のあすもあれど今宵は月をふかさずもがな

故郷月同十三年八月十五日

住む人のある世だにある蓬生に月ひとりすむあきや經ぬらむ  
月のすむやすがとやなるふるさとは蓬むぐらの露にやどりて

水郷月同十二年八月二十五日

なべて世の秋にはかへてこの里は宇治てふ名をも月に忘れむ

水郷月天和三年七月二十四日

この里の川づらきよくすむ影に月のうちなる名こそくもらね  
たをやめの行く袖たえて更くる夜に月をのみ吹くあすか川風

田家月寛文十二年八月十五日

結びとめぬ稻葉の露にうつろひて月も假庵のやどりとや思ふ

田家見月貞享元年九月十四日

秋かせのそよぎしづまる月更けて門田の稻葉つゆままがふなり  
もりあかす賤が山田の稻むしろこととふ月にしくものぞなき

關屋月貞享四年八月十五日

須磨の浦や關もる宿の軒端にも更けゆくなみの月はとどめす

閏月元禄元年十一月二十七日

月こそあれかげもる閏のいたまより嵐もいくよ袖をとふらむ  
まくらとは露おく袖をまきの戸になれていく夜の閏の月かけ

淺茅月貞享二年八月二十五日

ところせき露をも庭のひかりとは月にぞ見つる淺茅生のやど  
袖をのみ月のやすがになしもせでまた影やどす淺茅生のつゆ

名所月同五年五月二十五日

あたら夜をあかしの月の恨あれや心なき蟬のみるめばかりに  
甲斐がねは空すむ月のふもとにてなほ長き夜の佐夜のなか山



月前萩 天和三年九月十五日

影やどす月もや枝におもからし風を待つ間のつゆのあきはぎ  
いねがてに見しや幾夜の月ならむ下葉いろづく萩の戸のあき

月前蟲 貞享三年九月八日

おもほえずながむる影やふけぬらむ蟲の音すめる淺茅生の月  
あかすとやまがきの露の月影にあひやどりして蟲も鳴くらむ

月前雁 寛文十一年九月十三日

かささぎの南にめぐるおもかげを月に鳴き行く雁も見すらし

月前雁 同十三年八月二十五日

思ひたつ雲のかよひ路まよはでや夜よしと月に雁は來ぬらむ

月前鹿 同十二年八月十五日

鳴く聲のあはれ知らでも月にたれ今宵牡鹿のをしまでは見む

月前猿 貞享二年九月十三日

山人は出でにしあとに月ひとりすめるを侘びて猿も鳴くらし  
嶺ふかき雲をやわぶる鳴く猿のこゑ聞く月はそらにすむ夜も

月前猿 元禄五年九月十三日

今夜すむ月の名におふ山のかひありとも知らで猿や鳴くらむ  
明らけき月のかひある山の名も知らずや猿の侘びて鳴くらむ  
馴れてふす袖もぬるるや猿の鳴く深山の月のありあけのやど

月前鐘 延寶二年八月十五日

鐘の聲誰れかは聞きもおどろかむ更くるにそひてすめる月影

・ 月前聞鐘 天和三年七月十七日

月見つつよあくるも知らぬあきの夜に幾度鐘のおどろかすらむ

月下擣衣 貞享元年九月十四日

ながめつつ寐ぬ夜の月に聞けばまたよその砧もこゑぞ恨むる  
旅人の袖はさぞなとねやさむき月にしでうつころもへにけり



月下遊士 元祿二年十月十八日

幾夜とも知らずやあかすたはれ男の月に浮るる秋のころは  
思ふどち酌むさかづきの影ふけて残る夜をしむ秋のさとびと

月多秋友 延寶四年九月十五日

千代の秋をあかぬころにまかせても見ばや今宵の月の友人

月契 千秋同七年八月十三日 御會始

千代かけてくもらじ月の秋津島やまとの國はおなじひかりに

月不選處 貞享元年八月二十六日

あふぎ見よわが秋津洲のほかまでもあまねくてらす月讀の影

月前述懷 延寶三年九月十三日

いにしへに面變して見るらむも世世のくもゐの月にやさしき

寄月旅 寛文十三年八月二十五日

たびの袖さぞな野山の露分けて濡るるがほなる月をなれみむ

殘月越關 天和三年

起き出でし夜はふかかれや鈴鹿山關路はるかにおくる月かげ

惜 月 延寶四年十月二十六日

長月の名殘をさへにとりそへてをしと思ふ夜のありあけの影

惜 月 天和二年五月二十五日

いりがたの空すむつきのかげも見む霧なへだてそ西の山の端

寄月祝言 貞享元年八月二十六日

いく世世の月にもつきじ雲の上の月もてはやすやまと言の葉

初 雁 同三年五月二十日

聲はしてそれともわかす過ぎぬるやいづくの雲の衣かりがね

雲間初雁 寛文十一年八月二十五日

さやけしな月はいざよふ雲間よりまづもれ出づる初雁のこゑ

霧中雁 延寶九年八月九日



鳴く雁やなみだあらそふ草も木も露けき今朝の霧のしづくに  
霧中雁貞享二年九月二十三日

嶺いくへ越えてもおなじ朝霧の晴れぬおもひに雁や鳴くらむ  
鳴く雁のなみだに染むる色と見む霧にもれたる軒のこすゑは  
蘆邊雁同元年十月二十四日

あしの葉の思ひみだれて雁なくやかりしや鳴く江の水さむき秋かせのくれ  
難波江やあしのはなみの秋かせにつらも亂れておつる雁がね  
雁似字寛文十二年八月二十五日

朝霧のうへゆく雁のひとつらはあやしき鳥のあとばかりなる  
霧同十三年八月二十四日

朝がすみあはれむ春も千重まさる秋の霧にはくらべぐるしき  
曉 霧延寶五年十二月十三日

山かつらあかつきかけて立つ霧に猶長き夜の明けむともせず

曉 霧元祿二年九月十七日

明けぬまはただ朝霧の立田山吹きあへぬ風にかをりみちつつ  
ほのかなる月は有明の名のみして霧のまよひのあかぬ山の端

夕 霧延寶四年六月四日

心してふもとなびけ暮ればは月も待つべき峯のあきざり  
心なき草のたもとしをるらし暮るるまがきの霧のしづくに

古渡秋霧同元年十二月二十四日

明けやらぬ淀のわたりか河かせにひとすぢ霧の隙しらみても

古渡秋霧貞享二年九月二十一日

小舟のみ霧間に見えて人もなきわたりさびしき秋のゆふなみ

田家霧元祿三年四月二十五日

かり庵もる袖にも露はおくて田の稻葉にさぞな秋のゆふざり  
里とほき田中の庵のゆふけぶり霧のまよひに訪ふひともなし



遠村霧 天和三年七月二十四日

山賤のかへる家路もたどるまで夕ぎりふかし野邊のをちかた  
立つ霧もへだてぞはてぬ夕づく日さすや岡邊の里のひとむら

擣衣 同年三月十六日

はるかなる旅寐の秋の露をさへ袖にかけてやころもうつらむ

擣衣 貞享二年七月十日

あはれ誰がへだつる中の衣とてただうつたへに聲うらむらむ  
いねがてに聞くとは知らじ白妙のころも夜寒の月にうつこゑ

擣衣到曉 延寶元年九月二十四日

月かげのしらみはててや山かつらあかつきかけて絶えぬ砧も

擣衣到曉 寛文十三年九月二十四日

夕ぎりの身にしむ色はあさ衣うちあかす夜のしもにくらべば

曉 貞享三年八月

思ふこと數へ知るかとありあけの月にかすそふ鳴のはねがき

澤畔鳴 延寶四年九月二十四日

をりしもあれ秋に澤田のうき事をかきつめけらし鳴の羽がき

江 鶉 寛文十三年四月二十四日

秋といへば眞野の入江のうき事をおのれ知らでも鶉鳴くらむ

江 鶉 貞享五年九月二十八日

なれのみや秋のおもひは深き江のうきを鶉と音にたてて鳴く

野 分 寛文十二年九月二十五日

秋の色はあたりのこらじ巖をも吹きあげつべき今朝の野分に

菊 貞享三年八月

くれなるに匂ふさかりもなが月の末つみはやす菊ぞえならぬ

栽 菊 元祿元年十月四日

咲き出づる菊ぞよに似ぬ百草の後見むためと栽ゑしまがきに



菊久盛 延寶三年九月九日

めであかぬさかりやいく世霜にさへ色そめかへしにほふ白菊

菊爲花第一 寛文十二年九月九日

咲く菊やあまつ星かと雲の上になき花のひかり見すらむ

新菊有餘芳 同十年九月九日

咲きしより秋風遠くにほひ来て千とせもしるき菊のはつはな

每朝望菊 同十一年九月九日

をりふしの色あひなれやこの朝け昨日にも似す匂ふしらぎく

園深菊決榮 貞享二年九月九日

千代もつきじなべてうつろふ花園の霜にさかゆる菊の色香は

ももくさは散りみだれたる花園に秋のさかりをのこす菊かな

秋菊盈枝 同三年九月九日

いろ香もや小枝に今朝はおもからし花にかさなる花のしら菊

なが月の今日をさかりに咲く菊は小枝も花のところせげなる

離菊露芳 延寶七年九月九日

咲くきくのまがきにちかき袖とめて匂をゆづれ露のおひかせ

菊粧如錦 貞享元年九月九日

からにしき織るやいくむら園の菊この朝露をたてぬきにして

さまざまの色こきませて咲くきくに秋の錦はまがきにぞ見る

伴菊延齡 天和二年九月九日

今日ごとの色香にあかで菊の露ふちとなるよの秋も經ぬべし

飽かで經む秋をおもへば斧の柄の朽ちし所に咲けるきくかも

翫菊延齡 延寶二年九月九日

ためしありと菊の下みづ汲み見てや飽かぬ心に秋をまかせむ

挿頭菊 同四年九月九日

千代も見む今日の挿頭にさしかへて咲き出づる菊のふりぬ色香は



菊花久馥天和三年九月九日

不飽於毛布故故呂濃花能白菊波不散而千歲之秋也爾寶葉舞

霜の後の千年を松にちぎりてやあらしのかげに匂ふしらぎく

菊香春不如寛文十三年九月九日

重陽宴元祿三年六月二十五日

幾千代といはふ言葉も菊の枝に花咲きはすここのへのあき

行路薦同五年九月二十五日

ここながら宇津の山邊の秋を見て葛の葉分くる岩根木のもと

柞延寶四年八月二十四日

ははそ原おのがちしほの限とて薄きながらに散りなむをし

はじめみち元祿二年九月二十五日

霜にあへず散りなむはをし楹紅葉よその千入の色もつくさで  
しぐれつる軒端の山の木の間より立枝まがはぬはじ紅葉かな

里黄葉貞享元年八月十一日

やまもとの秋より浅きもみち葉に里わく露のこころをぞ見る

紅葉深寛文十二年九月二十五日

飽かず見るこころの色を比ぶとも比べぐるしき木木の紅葉ば

紅葉遍元祿三年六月十八日

庭のおものこすゑ色づく露にいま野山の木木は下葉染むらむ  
野も山も秋のさかりを今ぞ見む四方の時雨のそむるもみちに

雨後紅葉天和三年七月二十四日

降り出でしよるの時雨の跡見えてくれなる深き今朝の山の端

岡紅葉貞享三年五月十九日

露霜も染めのこすいろを夕づく日さすや岡邊の紅葉にぞ見る



瀧邊紅葉 寛文十三年九月二十五日

音聞けばそめぬ紅葉もさそふべき時雨とふるの瀧なくもがな

河紅葉 同十一年九月二十四日

立田川夜半のしぐれは枝を染め波を染むるや今朝のもみぢ葉

里紅葉 元禄二年六月十七日

初紅葉たがやどならむこのごろの軒端しぐれぬ里はあらしを

夕日さすふもとの紅葉をちこちにさらす錦のいくむらのさと

松間紅葉 延寶元年九月二十四日

もみぢ葉はまだあさ霧のした染にまじる松しも色をふかめて

松間紅葉 寛文十二年九月二十四日

たちそへば紅葉のにしき折ふしの色あひならぬ松もはえある

紅葉交松 同十一年

まだき散るもみぢはあやな松風のしぐるる音に色はまさりて

旅泊紅葉 延寶二年十二月二十四日

浮寐してこころをくだくとまりぶね磯山かげの紅葉むしろに

每人惜秋 貞享二年九月二十四日

誰れもいま惜むなごりはうきものに思ひし秋の行方ともなし

行く秋の形身とならばこのゆふべ誰れかは袖の露もはらはむ

秋欲暮 延寶四年九月二十四日

霜ならぬ野邊だにあれな慕ひ見む露のよすがに秋やとまると

暮 秋天和三年十月二十七日

色かはる末野のあらし吹きまよひ秋のかたみは露もとまらず

暮 秋貞享三年五月二十日

行きやらで暫し休らふ秋もあれな四方の紅葉のちりのまがひに

暮 秋月 寛文十一年九月二十四日

身にぞしむ今は秋のわかれ路にこころ細くも残るありあけ



暮秋霜 元祿元年九月二十八日

秋の行く道しるべとも見るばかり草をふゆ野にいそぐ霜かな

暮秋露 寛文十年九月二十四日

ながづきのすゑ葉もしろく吳竹の夜の間の露のしもにかはれる

暮秋海 同

ありあけの月をかたみのうら波にせめて秋なき花をだに見む

暮秋鐘聲 同十一年九月二十五日

聞きなれし入相のこゑの色も似すいまはの秋の野山さびしき

暮秋夢 同十年九月二十四日

行くあきの菊やもみぢを思寐のおもかげばかり夢にのこりて

秋 霜 延寶二年八月二十九日

よしや見よ千種ながらに秋の野の霜の花にはくらべぐるしき

秋山朝 寛文十二年八月二十四日

あけがたの月はをぐらの山の名に立つ朝霧は千重まさるらし

秋野夕 同

今はとてわけやはすてむおく露に暮るれば月もやどりとる野を

秋浦夜 同

月をこそまつが浦島こころある蟹のけぶりも立てぬしわざは

秋 河 貞享三年二月十二日

月よりもなほ身にしむは更くる夜のあらしにすめる秋の河音

秋山家 同年九月八日

世のうさはおもはぬ秋も山ふかき霧のしづくに袖やぬらさむ

秋田家 同二年八月十七日

捨てし世のうきにこりすば等閑に出でていぬべき深山邊の秋



秋 思延寶二年八月二十九日

秋はこれ誰がならはしのおもひぐさ尾花もしぼる袖のゆふ露

秋 旅同四年十月二十一日

深山路や紅葉のかけにやすむまぞせめて忘るる旅のうさかな

秋 雜貞享二年七月二十日

いつしかとしらべもかはる秋風をたのしむころの宿のつま琴

初秋色 同元年九月二十四日

秋かせの涼しく更くるなかぞらに白きを見れば天のかはなみ  
咲き出づる千種の花に染めかへてもとつ色なき野邊の露かな

中秋聲同

やまざとの秋は千ぐさの花よりもなほかすまさる色鳥のこゑ  
秋風の夜寒のころも織ることをもよほしたてて蟲も鳴くらし

後秋香同

つぎて咲く花はなしとや色かはる霜にもたへてなほ匂ふらむ  
春秋にめでこし花の色香をもわするるくさやにほふしらぎく

後 秋元祿二年十月二十五日

咲く菊をみつが一つの秋はあれど垣根のみちぞ霜にあれぬる  
かぞふればまだ長月のはつ霜に秋のちぐさのいろぞやつるる



靈元院御集 卷二

冬之部

初冬風 天和二年五月二十五日

吹きかはる今朝の嵐のはげしさを袖におぼえて冬は來にけり

初冬時雨 貞享元年七月二十八日

木の葉さへ散りかひ曇る時雨にも道やはまがふ冬は來にけり  
木の葉ちる軒端の時雨今朝ははやこころぞ冬の色にそめなす

初冬時雨 同二年九月二十一日

しぐれ行く雲も昨日の秋かけて見しいろかはる冬は來にけり

山館冬到 同元年十月二十六日



みやこにも冬をやさそふ軒端よりしぐれて出づる峯のうき雲  
冬きぬと誰れかは告げむ山住に軒端のくものうちしぐれつつ  
この住居いかにせよとか山かせの軒端あれそふ冬は來ぬらむ

時 雨 延寶五年四月二十五日

降らぬまも嵐の木の葉松のこゑおなじ軒端にしぐれしぐれて

時 雨 天和二年二月十六日

程もなくここにしぐれて降ると見し山邊は晴るる夕日影かな

時 雨 貞享三年五月十九日

山風のあとにただよふ浮雲やはれまもおかすまたしぐるらむ

時 雨 晴 寛文十一年十月二十五日

程ぞなきさはれて行く雲風のあとよりやがて晴るる時雨は

時 雨 過 天和三年十月九日

なごりなく晴るるゆふ日の軒端にも嵐の松はなほしぐれつつ

見るがうちに幾里かけてしぐるらむ誘ふあらしのすゑの浮雲

杜 時 雨 同 元年冬

つれなしな時雨もさらにまなく降るときはの杜のそめぬ緑は

行 路 時 雨 同 三年

ゆふ日かげほしあへぬ袖の追風に山路の雲ぞまたしぐれ行く

霧 中 時 雨

日かすふる旅の衣手ほしもあへず山より山にふるしぐれかな

朝 時 雨 天和十年十月二十九日

しぐれ行く雲にもれたる山の端にうつる朝日もさだめなき影

落 葉 嵐 延寶元年十一月二十四日

むら時雨聞きて一夜はすぎの門あけてあらしの落葉をぞ知る

夕 落 葉 天和元年冬

このゆふべあへずもろきや朝風の梢にたへし木の葉ともなき



落葉深 元祿五年二月十一日

色深く染むるにあかぬ言の葉の今よりさぞなつもる木のもと  
殿もりの朝ぎよめせしみぎりにも積るゆふべの風のみぢ葉

谷落葉 貞享二年十月四日

ひとりのみ深山おろしの谷陰によるのにしきをしく落葉かな  
ありとともとはかよはしぬ谷の下道はうづむ落葉にまかせてを見む

橋落葉 同年六月二十四日

ひこぼしも秋はかよひし河瀬かと紅葉をわたす水のうきはし  
幾重とてうづむ木の葉ぞ吹きおろす嵐のそらの谷のかけはし

瀧落葉 寛文十二年十一月十八日

みなかみのまさる音かと瀧浪にみだれておつる風のもみぢ葉

河落葉 元祿五年十月四日

立田川きのふの秋のみなとにや冬たつなみもおち葉せくらむ

枝にこそいまはあらしの立田姫見すや河瀬にたたむにしきを

河上落葉 同二年十月十八日

さそふ水あらしにまくる山川や落葉にむせぶ瀬瀬のいはがなみね

窓落葉 貞享五年六月十五日

木枯のおち葉しぐるる窓のうちに誰れ庵ふかき袖ぬらすらむ  
雲にそふ軒端のやまの風いたみ落葉もまどにしぐれ來にけり

殘菊帶霜 天和元年

はつ霜のおきまどはせる色もなし秋よりのちの庭のしらぎく  
さらにまた色そめかへしこの頃の霜にも枯れぬ菊ぞえならぬ

殘菊傍流 元祿五年十一月十日

香にめでし秋の日かずも行く水になほかげ見えてのこる白菊  
水無瀬川秋見し菊やそのままにありて老いせぬ影うつすらむ  
散るをこそさそふ水ある川岸にながれぬ影やのこるしらぎく



庭殘菊 元祿元年十月五日

神無月今日かざせとや秋のうちは折り残す菊のむらさきの庭  
むらさきの色そめまして朝ごとの霜にあらそふ庭のしらぎく

霜 貞享三年五月十九日

おくしにもにうづもれはてて木枯の落葉も今朝は色ぞのこらぬ

朝 霜 天和二年五月七日

ありあけのつれなく残る光にもおきまどはせる今朝の霜かな

夕 霜 元祿五年十一月二十五日

夕月夜かげさやかなる真砂にぞ置く霜しろきほども見えける

橋 霜 同四年十二月二十八日

行く駒も待てといはでや今朝の間の霜にあと見る前のたな橋  
かけはしのすゑは朝日の影ながらなれば霜ふむ谷の木がくれ

野外霜 天和三年九月二十九日

霜をへて枯るるはさぞな露にだに色かはりぬる野邊の淺茅生

寒庭霜 元祿三年十月二十五日

今朝のあさけ誰がふむ沓の下さえて霜をおどろく庭の真砂地  
聞きなるる砌のつるの聲絶えて松の葉しろき今朝のあさしも

閑庭霜 同二年十二月八日

春をだに待てといはなむ庭草の霜よりほかにかるるひとめも  
霜がれはよそめへだてぬ草の戸のうちあらはなる庭の静けさ

枯野眺望 貞享四年九月二十五日

ふゆがれも霜を花野の朝ぼらけ見よやちぐさの秋のかたみに  
あかざりし秋のちぐさの名残にもながめはすてじ野邊の霜枯

木 枯 寛文十三年十月二十五日

ときは木も枯葉ばかりはさそはれてみどり晴れたる木枯の山

木 枯 延寶四年五月二十五日



吹きかけしよその紅葉の色をさへ松にもはらふこがらしの風

木 枯 天和二年十一月十七日

さそはれぬ松のみ今朝はこゑたてて落葉すくなき木枯のかせ

寒樹交松 同三年九月二十二日

立ちならぶ木木は聲なき冬がれに松こそ風のやどりなりけれ  
吹きはらふあたりの木木の木枯にたへてつれなき松の色かな

木 枯 貞享二年十二月十三日

冬枯は花ならぬ松のかたはらに立ちならぶべき一木だになし  
ふゆがれの軒端に見よや見し秋の紅葉にそめぬ松のこころも

寒 松 元禄二年十二月二十五日

落葉せぬ松しも寒くあさなあさな枝に霜おきあらし吹くころ  
松さむき色やいづれと夕ごりの霜にあらしのこゑをあらそふ

寒 松 霜 貞享九年十一月十五日

これもまたいつともわかぬ色を見よ朝夕しものをかのべの松  
あさ霜のとくればこほる露見えて松の葉さむき山かせぞ吹く

寒 草 同三年五月十九日

菊はなほ花をものこす庭の面に霜のよもぎぞ枯れてまじれる

月照寒草 元禄五年十月二十五日

かげやどす露こそなけれ霜がれの草のはらをば月（ま）はとひけり（さ）

庭寒草 寛文十一年十月二十五日

花すすき穂に出でし秋の面影は霜にも枯れぬませのうちかな

霜草蟲吟 同十二年十一月二十四日

浅茅原しばしは霜の後までもかれぬ名だたるまつむしの鳴く

葦残如秋 貞享三年三月九日

きりぎりすおなじうらみも秋よりや深き霜夜の床に鳴くこゑ  
枯れはつる霜のした葉のきりぎりす秋を忘れぬ聲もはかなし



寒 蘆貞享三年八月

難波江や秋見し花のいろながら置くしもさむき蘆のむらだち

池寒蘆 延寶四年十二月四日

おくしもははらふものから蘆の葉をなほ吹きしをる池の朝風

寒蘆滿江 同元年十月十三日

波にをれ風にみだれて霜がれの入江はのこるむらあしもなし

夜寒知水 元祿三年九月十日

小夜風もねやもる月のさむしろに影見る水のこほるをぞ知る

澗 水寛文十年十一月二十四日

庵さむき夜のあらしにこの山のうへなる瀧やまづこほるらむ

まづこほるほそき流や谷の戸の水をたのしむこころにも似ぬ

瀧 水元祿二年七月二十五日

瀧のいとほ氷る岩根にかけ捨ててひとり落ちくる今朝の山風

朝ごとの水にむせぶ瀧の絲やなかのほそをの絶えむとすらむ

田 水延寶四年六月十三日

朽ち残る霜のいなぐさそのままに氷のとづる田の面さびしも

田 水貞享二年八月七日

おちばぼしをも閉ぢそへけりな山陰の今朝の嵐にこほる田の面は

解けやらぬ田の面のみづの氷もや種まく春のひかり待つらむ

井 水寛文十三年十月二十五日

いつかまた手には結ばむひもかがみ見るだに寒き山の井の水

井邊水 同十一年十二月二十四日

つららゐる山井や人もわすれ水絶えてこの頃汲むかげもなき

冬 月天和三年

隈なさぞ秋よりけなるこがらしの木の間さはらぬ冬の夜の月

寒夜月 延寶五年十二月二十四日



霜の上のみがく光もまたたぐひあらし吹く夜の月のさむけさ

山寒月寛文十二年十月二十三日

さそはれぬ月の桂のもみぢ葉やいとど照りそふこがらしの山

寒閨月同十年十一月二十四日

冴ゆる夜もたれかゆるさぬ玉すだれひまもとめ入る閨の月影

惟 柴貞享元年十一月二十四日

朝な夕な霜うちはらひやまがつの折る手やさむきみねの椎柴

うら葉さへひとつに白しはしたかのをへの霜に立てる椎柴

千 鳥 延寶四年九月四日

聲もややとほきわたりの河千鳥ここにかよはぬ妻やとひ行く

夕千鳥貞享二年五月十一日

難波がた夕しもしろき蘆邊より鳴く音もさむく立つ千鳥かな

夕しほに入江のなみを立ちわかれ千鳥もとむる千鳥鳴くなり

河千鳥延寶六年四月二十四日

村千鳥ここをせにとや佐保のうらの河音すめる月に鳴き行く

湖千鳥同元年十一月二十四日

松一木立てるうらわに友なしの身をよそへてや千鳥鳴くらむ

浦千鳥寛文十年十二月十八日

小夜千鳥なれも心やすまあかし浦づたひしてつきに鳴き行く

浦千鳥天和二年五月七日

須磨の浦や苦屋もちかく鳴く千鳥いかなる蟻の寐覺にか聞く

潟千鳥貞享三年五月二十日

潮むかふ干潟の千鳥もろごゑに波のこころをうらみてぞ鳴く

水 鳥 同三年五月二十日

こほりゐる汀の鴨の霜をさへかさねて侘ぶるこゑのさむけさ

水 鳥 元祿元年十一月二十五日



名のみして冬がれ知らぬあしかもの青羽が上も霜はおくらし  
霜はらふ梢のをしも池みづのうき寐かはらぬ夜さむ侘ぶらむ

水鳥多天和二年五月二十五日

池の面にむれゐるをしの翅こそおち葉よりなほ波を染めけれ

鴨寛文十一年十一月二十四日

うき寐には鴨ぞ鳴くなる夏箕川山かげ冴えてあらし吹く夜に

江上鴛貞享元年十一月十五日

かけたえし秋の錦のおなじ江にあらふ色こきをしのけごろも  
江の水に羽うちかはし棲む鴛もこほる浮寐を侘びつつや鳴く

網代元禄五年十一月二十五日

世世経れば貢供へしためしをも知らでや宇治の網代もるらむ

霰貞享三年五月十九日

信樂やこれより奥のいかならむ外山も今朝はあられ降るなり

雲さむき空にあられをさそひ出でて嵐のかせに凍るとぞ見る

野霰寛文十年六月二十四日

冴えくらし猪名のささ原たまはやす霰みだるる武庫の山かせ  
冴えくらし霰みだれて有馬山やまかせさやぐ猪名のささはら

野霰延寶四年十月二十四日

ひととほり時雨よりけにはげしきや霰にくもる野風なるらむ

古屋霰同四年六月二十四日

板間あらみ軒のしのぶの枯葉にもしばしたまらでもる霰かな

篠上霰貞享二年九月十九日

それとなき垣根の小篠おと立ててのこるみどりを霰にぞ見る  
かきくらし霰ふる野の小篠はら枯れぬ青葉も散るばかりなる

柴霰延寶元年十月二十四日

あらしにはおち葉も知らぬ椎柴にしひて霰のおとぞはげしき



霰驚夢延寶二年十一月二十八日

閨の上に降るや霰のあらましきこゑのうちより夢もくだけで

霰似玉天和三年十月二十一日

あられ散るをか篠原わけ行けば拾はぬそでも玉ぞみだるる

あられみだれて同二年五月二十四日

聞きなれし木の葉しぐれのたぐひには霰みだれて窓をうつ聲

篠の葉の深山に聞かばいかならむ霰みだれてさやぐあらしを

殘 雁貞享二年十月四日

秋風にさそはれのこる雁がねもこのゆふ霜を侘びて來ぬらむ

ほす空もなく音にそひて涙もやしぐるる雲のころもかりがね

雪寛文十一年十一月二十四日

つくらぬもわが心なる山や見む雪のつもるぞこのへのには

月花もひとつながめにおしこめてあけほのしろき九重のには

初 雪天和元年十一月二十四日

いつよりも有明の月の山の端にしろきを見れば降れるはつ雪

めづらしな今年は遠の嶺にだにまだ見ぬさきの庭のはつゆき

初 雪寛文十二年二月二十四日

聞きわびし軒端しづかに松風もうづもれ初めてつもるはつ雪

水路新雪元祿四年十二月二十五日

柚木にはつもらぬ色をいかだしが袖にや拂ふ今朝のはつゆき

降りそめて積りもあへぬ山もとの雪を見せたるあけのそぼ舟

深 雪同二年正月二十三日

白雪のよよのふること跡はあれど深き道こそなほたどりけれ

下をれのかすそふ陰やふかみどり松と竹との今朝のしらゆき

逐日雪深寛文十二年十二月二十五日

今朝ははや下折れけりな昨日までおもげに見えし雪の松が枝



雪散風 延寶四年十一月二十四日

つもりても猶うづもれぬ松風はありとや枝のゆきはらふらむ

夜 雪 貞享元年十月二十五日

九重もつもれる雪のふるごとをよるも見よとや窓にさやけき  
吳竹のよるはすがらのしたをれに降りそふ雪も窓に知られて

遠山雪 元祿三年十一月四日

比良の嶺はかさなる山の遠ながらここに（ま）みやこの今朝の初雪  
このごろの雪は比良の嶺いまいくか都の北のやまごしに見む

遠嶺雪 延寶元年十一月二十四日

繪にうつし語るを聞きて富士の嶺の雪ぞ誠に見しばかりなる

雪埋路 天和二年二月二十四日

この頃はもとこし駒もたどるまでうづもれぬらし雪のふる道  
落葉まではらひし道もこのごろの雪にまかする宿のさびしさ

海邊雪 元祿二年十月二十五日

おきつ風さむきゆふべの潮ぐもり空にもみちぬ雪のしらなみ  
和田の原空よりこゆと見る波や名にたつすゑの松のしらゆき

湖 雪 寛文十年二月二十四日

たぐひなきながめにもあるか唐崎や一木の松の雪のあけぼの  
濱邊雪 貞享三年三月二十四日

いづくをかなざさとは見む濱風の吹上に立てる雪のしらなみ  
はるかなるみるめにまじる色ぞなき千里の濱の雪のあけぼの

嶋 雪 天和二年五月二十五日

住むあまも心ありてやみるめかる降りつむ雪の松がうらしま  
都 雪 貞享元年十一月二十四日

ながめやる梢の雪の四方に今朝みやこは花の名こそかくれね  
降りつもる雪はさながら花とのみみやこの梢はるないそぎそ



社頭雪 貞享五年六月十七日

今朝のあさけぬさとる袖もさむげにて雪に起きふす神の宮人  
あと絶えずはこぶあゆみを雪の上に見るもかしこき神の廣前

草庵雪 同二年十二月二十一日

おく霜は知らぬひとめもかれねとや草の戸とづる今朝の白雪  
霜さやぎあられみだれし篠の屋の軒端あとなくうづむ雪かな

庭 雪 同三年八月

おもかげは月と花とにのこるとも消えなばをしき庭の雪かな

庭 雪 元禄二年正月二十五日

降りつみて枝もとををの今朝のゆきに砌の木木ぞ冬も木深き  
ふりはへて誰れかはとはむそれとなき垣根の道は雪拂ふとも

竹 雪 天和二年五月二十五日

松が枝はつもれるほどやおもからぬ竹にまづ聞く下をれの聲

竹 雪 貞享元年十二月二十四日

くれ竹のよをかかねたる雪折にのこるみどりぞ窓にすくなき  
降りうづむ雪やいくかの窓の竹もとのみどりも忘るばかりに

雪埋竹 延寶四年十一月二十四日

おそくとくすゑふす竹にかさねあげて籬は山とつもる雪かな

雪朝遠樹 同八年十二月二十四日

冴えし夜のあらしのたかね明けそめて横雲しろき雪の松ばら

雪似花 貞享五年正月二十五日

花とのみおもふに飽かて一枝はたをりもすべき木木の雪かな  
にほはねどころろづからぞ花と見る春まつ園の木木のしら雪

依雪待人 寛文十三年十一月二十五日

わが跡は雪にをしみて待つ人のこぬもこころの友ならぬかは

雪中望 同十年十一月二十四日



いかならむ都の富士を見ても思ふ名さへ高嶺の雪のあけぼの

雪朝眺望 貞享三年三月十七日

降りつみて山は鏡と見る雪にひかりあひたるあさづく日かな  
めづらしな波もまがはぬ色に今朝見ゆる小島の雪のひかりは

雪朝眺望 元禄四年三月二十四日

今朝や名に立つあらなみのするゑの松雪に晴れたる海ごしの山  
今朝むかふ山はかがみの名もしるく鴉てる光ゆきにみがきて

名所雪 同五年六月十三日

春は見し松ものこらすうづもれて花にふりせぬみよし野の雪  
かりにもと待ちしこころも道絶えてこのごろ雪は深草のさと

鷹 狩 延寶二年六月二十四日

名残あれや狩り暮す野の歸るさに跡より鳥の羽ぶき出でつつ

雪中鷹狩 貞享二年十月十四日

み狩野や散りかひくもる雪にいま手かへる鷹も道やまがはむ  
犬飼のまだ狩りゆかぬひとかたに跡ある雪やとりのおちぐさ

狩場風 同二年十一月十四日

暮れぬ間は立ちもかへらじ狩衣すそ野のあらし袖さむくとも  
かり衣きのふも今日もとまり野に夜をへて寒き柴のしたかせ

狩場寒 延寶五年十二月二十四日

明日もこむ今日は寒のふりはへて分けも盡さぬ小野の狩場に

炭 竈 貞享元年三月十三日

たちやみて靡くけぶりに山さむき嵐を見する小野のすみがま  
冬さむき深山は賤のおのれさへ炭やくけぶり住みうかるらし

炭 竈 同三年八月

冬さむき峯のけぶりをたのみにて炭賣るわざもあはれ世の中

炭竈雪 同元年八月十一日



小野山や待ちえし今朝の雪をさぞ都にいそぐみねのすみやき  
降りつみてくまなき雪の峯に今朝煙な立てそ小野のすみがま

爐 火寛文十一年十二月二十五日

夜半の雪に松の風さへうづみ火のひかり明け行く聞の静けさ

向爐火天和二年五月二十五日

霜ふくる夜半ぞ知らるる埋火もさながらしろき灰がちにして

向爐火貞享元年十二月六日

埋火のひかりのどかにむかふ夜を霜に愁へて誰れあかすらむ  
消えのこるひかりも灰の底に見てあかつき寒き聞のうづみ火

豊明節會同三年五月二十日

少女子が雪をめぐらす袖の上に散りくる色もをりにあひつつ

神 樂寛文十一年十二月二十五日

聞くからに身にしむものよ更くる夜の霜に冴えたる明星の聲

神 樂元祿三年十月二十五日

弓といへばこれも本末よるの庭に歌ふや神のこころひくらし  
ここのへの霜に幾世をかれせぬや神の御前のさかき葉のこゑ

深夜神樂同四年六月十三日

身にぞしむ庭しろたへの霜のうへに影ふくる夜の星うたふ聲  
八度おく霜ふかき夜にをりかへしうたふ榊葉こゑもかれせず

禁中神樂寛文十二年十一月

九重や霜をかさねてうたふ夜もさぞな深山はあられ降るらし

年内早梅同十二年十二月二十四日

春ちかきなか垣越えて咲く梅や年のこなたにまづにほふらむ

年欲暮同十一年十二月二十五日

かすそひし月日も早く吳竹のひと夜ふた夜のなごりをぞ思ふ  
歳 暮同十二年十二月二十五日



花になれ月をめでしも一とせの夢にまさらぬ名残をぞおもふ

歳 暮 延寶五年四月四日

つとめなき身のため惜む月日しもなかなか早く暮るる年かな  
またこゆる年なみはやし春秋とうつる月日のするのまつやま

歳暮近 貞享四年八月二十五日

今ここに年も越ゆべくあし垣のいふかひなくぞ春はまぢかき  
をしめども年の日かすの程なきに數へすててや春を待たまし

家家歳暮 寛文十二年十二月二十四日

待ちをしむ思やかはる誰が里もいまはたおなじ年のゆききに

歳暮梅 貞享十二年十二月九日

行く年の名残をおきて咲く梅にかた枝は春をいそがずもなし  
いつしかと春待つ梅や行く年もほどなき庭のゆきに咲くらむ

春卜隣 元祿五年十二月二十五日

雪さむき北野の梅のいつしかとしめのほかなる春を待つころ

冬 星 貞享四年十一月二十五日

行きめぐる星のやどりの幾度にことしも冬のなかば暮れぬる  
咲く梅の春待つ宿は暮るる夜の木の間の星もはなかとや見む

冬 風 同二年十月十二日

吹きいるるこすの間さむし落葉せし軒の梢はかせもさはらで  
吹きかへて秋よりけなる風のおとに目に見ぬ冬をまたぞ驚く

冬 朝 元祿三年十二月二十五日

露すがるひかりも寒し朝日かげなれば解け行く軒のたるひに  
たがひせし軒のしたかせ露かけて日かげもさむき朝戸出の袖

冬 岡 貞享四年十一月二十五日

このねぬる夜さむをさぞと水莖の岡のやかたにおけるあさ霜  
かの岡やこぬ誰がための秣とてからくも霜にいまはかるらむ



冬 默元祿四年十月二十五日

深く入りてすめるや何のかひよとも聞かぬ牡鹿の冬ごもる山  
いかならむ深山の霜をしきしのび臥猪の床にわぶる夜さむは

冬述 懷貞享二年十二月十三日

枝の雪をならしてこそは咲き出でむ言葉の花の春も待たれめ  
かきながす跡とどこほる水ぐきに咲くてふ花を雪はかさなむ

冬 祝 天和三年十月二日

一年のゆたかに暮れしことぶきもきこえあぐべき春ぞ近づく

冬有 乳山寛文十一年十一月二十五日

あらし山幾重わけきて矢田の野に雪よりのちの霜をだに見す

冬小 鹽山同十二年十月二十四日

をしほ山これやむかしの小松原いま見る雪のかげの木だかさ

冬浮 島原同年同月二十五日

さやけしな雲もうき立つうき島の松こそ見えね雪のひとむら

冬片 野 同十一年十一月二十五日

名残ある片野の野邊は飛ぶ鳥のあすかりゆかむ雪は降るとも

冬清 瀧川 同十二年十月二十五日

いかばかり山わけごろもさむからむ清瀧川もこほるあらしに

冬田 蓑島 同十七年十月二十四日

霜をさへ名にはかくれずかさぬらし田蓑の島の鶴の毛ごろも



戀之部

戀寛文十一年六月二十四日

遂にいかに戀てふ物ようきを恨みつらきにまくる心づくしも

戀同年十一月十四日

つれなさの遂に報はば憂しと思ふおのがためさへ人に悲しき

初 戀延寶四年十月十三日

ぬれそむる今だはたいかに袖の露かかるおもひを思ひかへさむ

初 戀貞享元年六月二日

いりそめてあやなく身をや盡さまし人やりならぬ戀の山路やまみちに  
ゆくへなき戀のみち芝ふみわけて今日かけそむる袖のうは露

思不言戀同年十月二十四日

なかにある思や見えむ思ふとはいはぬものから岩木ならねば

おもひあへぬ下の亂にあぢきなくいはで忍ぶの奥や知られむ

洩始戀寛文十二年正月二十五日

せめて知れいへばさらなるわが思こころ餘りて言葉たらずと

洩始戀延寶九年五月四日

もらさじの心にあまる一言をただなほざりに聞きはなすなよ  
言に出でていへばさらなるわが戀を知らし人の心かへして

洩始戀貞享元年十一月六日

つつむにもあまりし程のおもひとて心をつくす言の葉ぞなき

言出戀元禄元年十一月二十五日

くれなるの涙こきませ色に出づる言葉の露のほどを知らなむ  
年月はかけても更にいには波のうちつけごとと聞くらむもうき

忍 戀貞享三年

袖の上にかけてな見せそ同じ名のしのぶが原のちは露みだるとも



忍久戀 延寶二年四月二十五日

年も經ぬうち出でぬ中の思さへ水のさざれのかずかすにして

忍久戀 同四年二月十三日

忍ぶれば人のつらさも知らぬ間をわが年月のたのみにはして

久忍戀 同八年二月十四日

ともす<sup>とれずい</sup>れば亂れそむべき涙をもしのぶもぢずり年は經にけり

忍涙戀 寛文十二年三月十九日

あやにくにせきはかへさでわれからの浮名もらさむ涙悲しき

忍涙戀 延寶二年二月十一日

せきかへす涙もはかな世にしのお心をそでのしがらみにして

共忍戀 同五年十二月二十四日

わが方の思にまけむはてもうし色に出でじのこころくらべは

相互忍戀 同十二年五月二十五日

知られずばともに知らじな山の名のいはでしのぶの奥の心を

堪忍戀 元祿五年三月十八日

知られじのうきにたへてぞ年へぬる世にも人にもつつむ思は

聞 戀 延寶五年二月四日

さすがまた見おとりすべき方もやと語りなすしも心とまりて

聞くままにうつる心の見ゆらむもさながら向ふ人につつまし

見 戀 寛文十三年正月十五日

立ちかへりせめてみるめをかりそめの契かひなき袖のうら波

見 戀 貞享元年七月二十四日

見ずもあらぬ眺に暮す空よりもあやなや誰れと知らでやみなば

いまぞ知るあしき野分の風よりも見しはまさされる心さわぎを

未見戀 元祿四年四月二十五日

思寐の夢路まさしくかよふともなほ頼まれじ知らぬおもかけ



うつつにてまだ見ぬ人のおもかげは夢にも通ふ道やなからむ  
僅見戀 元祿四年二月二十五日

曙のかすめる花によそへしもおほけなき身のうきおもひかな  
三日月の曇らばかりに見し人の影は身にそふたぐひさへうき  
纒見戀 貞享三年五月十九日

あやなきは見し小車のしたすだれ誰れとも知らでしたふ面影  
通書戀 寛文十一年七月二十五日

思ふ人かきながすてふ水莖のあとだにとまるえにしならずや  
通書戀 貞享五年四月六日

ながれてとたのめだにせぬ中河にあはれかすかく水莖のあと  
いつまでか敷かきたえぬ水莖のあとはかなさを人に見えまし  
忍通書戀 同元年三月二十四日

かきかへてあらぬさまなる筆の跡のそれと忍ぶる中に嬉しき

さのみ世に忍ぶる中のわりなきは誰が玉章ものこすことの葉

尋縁戀 元祿五年七月二十五日

我れぞただかよはむ道のしるべとも尋ね侘びぬる戀のやま

初尋縁戀 貞享二年九月二十一日

紫のゆかりにだにもむさし野のつゆかけそめし袖を見せばや

初尋縁戀 元祿四年八月二十五日

草の原こととふ露のよすがだに尋ね侘びぬと誰れに告げまし  
入りそめてあやなや誰れを導しとくとも我がまだ知らぬ戀の山路に  
ほのめかす風のたよりにまだ知らで亂れなそめそ露のした萩

尋在所戀 貞享二年五月十九日

とはれじのかごとばかりに教へしや跡なき野邊の鴉の草ぐき

祈 戀 寛文十三年三月二十三日

誰が祈またかくらくの初瀬かせよそのみしめにあやな靡かば



祈 戀 貞享二年六月十九日

うき契ともに朽ちなむはてもうしかけて年ふる杜のしめなは

祈 戀 同三年五月十五日

いかにせむ年経ていのる逢坂にせきもる神のゆるしなき身を

わがなかはむすびもおかぬ契とやかけてかひなき杜のしめ繩

久祈戀 延寶三年四月二十五日

よしさらば戀せじといふはらへせし御手洗川の末もとほらで

祈久戀 寛文十一年三月二十五日

かけて祈る年もへにけりみしめなはむすばほれたる中の契を

祈身戀 同十二年八月二十五日

うしや身のいける爲こそと計にながらへまうき世をも祈らむ

祈不逢戀 貞享二年九月二十一日

三輪の山いく年月をすぎの葉のつれなきいろに祈り來ぬらむ

祈神戀 同三年二月十一日

年へても逢瀬をたどる三輪川にいつかと神のしるしをぞ待つ

逢瀬なき身はうき年をふる川にいつかは神のしるし待ち見む

忍祈神戀 寛文十二年三月二十四日

忍びえぬおもひの綱の末ならばよりもあはせよ神のしめなは

誓 戀

たのまじな頼むにつけてなかなかの心見ゆべき人のちかひを

憑誓言戀 天和三年

ひとことの誓をひとにたのむかな誠すくなき世をばわすれて

契 戀 寛文十二年三月二十四日

ちぎりおくなげのなさけも頼むぞよ偽とてもかはるならひに

契 戀 貞享五年三月十日

露顯してちぎる妹背のなかにこそうしろやすくも末を頼まめ



漏刻のうつるも知らずにひ枕ことの葉おほくちぎりおくとて

契 戀 元祿二年六月二十五日

わが中よあひ思ふをしの契ありて絶ゆるならひのいける限は  
いける日の行末をだに知らぬ身の後の世かけて頼むはかなさ

互契戀 同四年十一月二十六日

あひ思へば神代ひさしき契だにかはらぬものとのむ中かな  
ちぎりおきて誰が心をもうたがはぬ妹背の中や末もとほらむ

互契戀 同五年九月二十五日

おなじその行末かくることの葉にちぎり知らるる末は頼もし

朝契戀 貞享元年十月二十五日

變るなよおきなば露と消えぬべき身もながらふる今朝の一言  
かならずと頼むる今朝の道芝に消えなで露のくれを待たばや

馴 戀 寛文十二年六月二十五日

何かいとふ馴るるを人は涙こそ見るも見まくのほしあへぬ袖

馴 戀 貞享三年

人よなどなかなかつらき馴れゆかば思なくてもありぬべき世に

不逢戀 元祿三年九月十六日

いくとせをわたりし戀のみちのくに逢隈川はなほたどれとや

不逢戀 寛文十年十月二十九日

うしつらし後の心にとばかりを逢ひ見ぬ中のなぐさめにして

不逢戀 延寶二年五月十八日

つれなきをしひてたのむたふもえにしぞと思ふにしたふたのむ中の年月

不逢戀 貞享元年二月二十四日

逢ふ事はかくてもつひにあらじ身を戀の奴となしはててうき  
うしつらし逢はむともせぬ年月に契なき身のほども知られて

馴 不逢戀 同三年三月二十四日



月に日につらさ見はつる我が中は馴るるをたのむ慰めもなし  
つれなくてやみなむすゑを思ふには馴るるも人にうき契かな

頼不逢戀 寛文十一年八月十三日

こりすまに又こそ頼め逢はじとはさすがいはぬを慰めにして

偽 戀 元祿三年四月二十五日

さりともとたのみこしかな偽にならひおきける身をも忘れて  
ことよきを幾度ひとにたのみけむ誠なき世のものわすれして

待 戀 寛文十二年十二月七日

とはれつるいつのならひに一言の物忘れせず待つもはかなき

契待戀 同十年十一月二十四日

ちぎりしはただ等閑なほまの夕だに身はならはしに待ちやこがれむ

契待戀 同十三年三月二十四日

契りしを夢になせとや待つ宵のことわり過ぎて鐘かねもふけゆく

送書待戀 同十三年三月二十五日

かきやりしその一言の答こたへだに聞きあへぬ暮のなに待たるらむ

毎夕待戀 元祿三年二月二十五日

いく夕たのまぬものの待たれけむいひしばかりの忘れ形見に  
見せばやなとはれぬ中の夕ながめ松はいつともわかぬ軒端を

待空戀 寛文十二年三月二十五日

美まし待つよなよ夜なながらの鳥の音に誰がきぬぎぬか袖ぬらすらむ

逢 戀 貞享三年八月

新枕そむきがちななるものはちも憎からぬさまの人とやは見ぬ

俄初逢戀 元祿五年七月八日

人ごころひくことの緒の思ひあへず結びそめしも契あやしき  
忍びてといひし言葉にかけそめし露のなさけも誰れとかは知る

祈逢戀 延寶九年六月十九日



するまでとなほこそ頼め貴舟川あふ瀬うれしき神のしるべを

尋逢戀 元祿三年正月二十五日

はなのひもとくる心も今日は見つかひある戀の山路たづねて

適逢戀 貞享二年正月二十八日

七夕のつらきためしにならふ身のさらば絶えせぬ契ともがな

稀逢戀 延寶五年四月二十一日

人に猶うらみぞ残る逢ふ夜半もまだならはしの絶間あらばと

逢夢戀 貞享四年十月二十五日

逢はざらばあやないつまで誠なきゆめを現のなぐさめにせむ  
つらからず見えしもはかな思寐の夢路にかよふ人のおもかけ

逢夢戀 元祿二年二月六日

いさめしも忘れずながらうたた寐の夢の契に身をぞなぐさむ  
玉くしげ明けむあしたの雲とだに契りもおかぬ夢のはかなさ

別 戀 天和三年十月二十七日

おもかけは身をもはなれぬ歸るさに心をそへて送らましかば

別 戀 貞享二年五月十九日

空音鳴くためしもあるを憂きわかれ鳥の八聲に任せずもがな

欲別戀 元祿二年七月二十五日

更にまたぬるとはなしの露の間をおきあへぬ今朝の後朝ごうの袖  
聞の戸を今朝出でがてのやすらひもさていく程をたのむ別路

急別戀 貞享元年三月六日

小夜ふかく急ぐ別はあかつきの鳥だに鳴かぬ音をつくせとや  
明けたたば人の見るべきうしろ手をつつむに急ぐ後朝はうし

厭別戀 延寶八年十二月十八日

よひの間の別を人にとどめてもあかつき近きなごりやはなき

惜別戀 寛文十二年二月一日



慕ひ侘びぬせめて思ふが中ならばとばかりあかぬ今朝の別を

後朝戀 貞享三年五月十九日

ねくたれの今朝の面影身にそへて飽かぬ名残のたまぐらの袖

遇不逢戀 寛文十二年七月二十四日

思ふぞよいつかはまたも逢坂の關しまさしくへだて行く身を

無名立戀 貞享二年七月二十四日

厭はじよおふの浦波さわぐ名も逢ふ事なしのうき身ならずば

いつよりの世に託つべきなき名をも思ある身のえやははるけむ

不知名戀 寛文十二年六月二十五日

はかなしや思のみこそとばかりのなげのなさけもかけぬ契は

顯 戀 延寶五年四月十三日

知るといへば枕をさへや託たまし思ひあへずも立ちし浮名ぞ

顯 戀 貞享三年五月二十日

いかでかく浮名を世には洩しけむ思ふ人にもつつみこし身に

顯 涙 戀 寛文十年六月七日

袖の上につつみもはてぬ涙こそつひにおもひの色に出でけれ

依 涙 顯 戀 貞享三年六月十七日

知られじと思ひし袖のなみだ河うき名も今はながれそひつつ

わが袖のほかにやは行く涙川などてうき名を世にもらしけむ

顯 悔 戀 延寶四年七月二十四日

あだ波の立つをば知らでたのみしは淺き心のみづからぞうき

増 戀 天和三年三月十六日

おもひ河まさる汀をいかがせむ身はうたかたの消えかへりつつ

増 戀 貞享四年六月二十四日

うらみにも心をわけしほどやなほせめてひまある思なりけむ

あぢきなき心くらべの行方とてつらさも戀もいやまさるらむ



逢増戀 延寶三年三月十三日

うちとくる心を人もかたりいでて逢ふ夜はさらに添ふ思かな

逢増戀 貞享五年四月二日

新枕あふにかふべきあだものの身を忘れても添ふおもひかな  
いまぞ知るこれを限とおもひしも逢ひ見ぬさきの心まどひを

逢後増戀 寛文十三年十月二十五日

今こそとはるけむものをあふくまのいとど思の霧ふかくなる

切 戀 延寶十三年七月二十五日

露の身よ消えかへりても哀てふ言の葉ぐさはかからましかば

切 戀 貞享元年十一月二十四日

せめて人ありのすさびにつらくとも戀死なむ身を哀とはみよ  
戀死なむ身をやは人に惜むべきこの世に限るつらさなりせば

厭 戀 天和三年二月二十五日

戀死なばとばかり人に託つとも立つ名にかへて猶や厭はむ  
かけたえてやまむともせずささがにの厭ふにはゆる心くらべは

厭 戀 元祿二年十二月二十五日

大空に照る日をさしていふかひもなきたる朝の身をいかにせむ  
うしやその心もひかぬふし繁き賤が手ぐりの厭はるる身は

被厭戀 寛文十年十一月二十四日

思へうき深山木とても厭はれぬせめてこころの花咲きてこそ

見形厭戀 天和三年

厭ふよりこころの花も人知れぬかげの朽木の身をいかにせむ

被厭賤戀 延寶元年十二月二十四日

厭はるる身を思ふにもうきちぎり今はたいかにしづの小田巻

悔 戀 同三年二月二十一日

玉すだれ見すばと思ひかへすにもすける心ぞ我れながらうき



變 戀寛文十三年七月二十四日

秋の色にかはる真葛のうらみをば吹きも傳へぬ風さへぞうき

臨期變戀同十一年九月二十五日

契りしにめぐりにける小車をまた誰が方に引きやたがへし  
ちぎりしも偽なりしくればどりあやな思へば待ちしくやしき

稀 戀同十年八月二十四日

まれならば羽をならべて鵲のわたすちぎりにせめてあえなむ

久 戀同年三月二十四日

おもひ川あやな逢瀬もしら波をかけていつまで袖ぬらすらむ

久 戀天和三年七月十七日

うき波に濡れて年ふるはま楸朽ちせぬ身をもいまはたのます  
命だにあらばと待ちし逢ふことを思ひたえても年は經にけり

遠 戀同年三月二十四日

今は世にあるにもあらぬ身のうさを消えてや歎くよその帚木  
あひおもふ道だにあらばとほくとも天の浮橋かけてたのまむかよはし

隔遠路戀延寶四年八月二十四日

海山もへだてむものか武藏あふみかけてかよへるなかの思は

窈窕隔簾談貞享二年

心さへ隔てけるかな玉すだれかけはなれたるいらへのみして  
ほのかなるいくへをだにも珠簾こすのま近く聞きてうれしき  
いひかはすをりだにかかる珠だれのへだて心を何のこすらむ

忘 戀延寶四年六月二十四日

わすれじのその一言にいまさらの憂き思出になにとどめけむ

被忘戀貞享二年九月十五日

かはらじといひし心のたれなればもとの契をわすれはつらむ

難忘戀延寶二年三月二十四日



うとくなるこの年月のつらさにもありし情をわすれかねつつ

恨 戀 寛文十二年六月二十四日

つらきにも情のまじるほどと知れ見しらぬさきに過ぎし恨は  
おしこめて知られぬ程に數まさる恨はつひにいかでのどめむ

恨 戀 延寶九年六月九日

なみの間もあらばやいはむ石見瀉いはぬよりこそふかき恨を

恨 戀 貞享三年

戀死なばいかにせむとか報あるこの世に人をうらみそめけむ

恨 久戀 天和二年九月二十二日

つれなさはみさをの松を大淀のうらみて經ぬる年なみぞうき  
年經ぬるうらみは人の耳なれて聞きもいれずや今はなりぬる

恨 絶戀 貞享四年五月七日

かくばかりことわり知らで中絶えば人にかくさむ恨なりしを

人はそのかたはしをだに聞かじとて恨にあへず中絶えぬらむ

絶 戀 延寶四年九月二十五日

さまざまの障をいひて過ぎし間にやがて心も見えて絶えぬる

春 戀 天和二年五月二十五日

咲く花のをりだに人のつらからは年にまれなる中や絶えなむ

春見戀 貞享三年三月十四日

見そめつる袖のみぬれて初草のわか葉の露は手にもたまらず  
忘れめや立ちよる花の木の下にをらぬなげきを添へしおも影

秋 戀 延寶四年十二月十三日

ふけそはば待ちやよわらむ秋の夜のながきを人にたのむ心も

關路戀 天和三年五月二十日

知らせばや關の杉むらよそに見て過ぎし車のわがこころをば  
わかれ行く今朝はまだしき關ならでまた逢坂の道やへだてむ